

一文 芸一

草の丘

第 27 号



2024 年 11 月 印旛文学の会

URL <http://bungeikusano-oka.raindrop.jp/>

文芸

草の丘 第二七号（二〇二四年十二月）

目次 草の丘 第二七号

《詩》

友よ

中川とら……………一

命ミツシヨン その4

安達真魚……………四

《短編小説》

小説「東大闘争」

畑中康郎……………九

《ショートショート》

限りある時間

中川とら……………二九

《エッセイ》

トワイライト世代 その5 安達真魚……………三二

《連載小説》

この前・この間―第5回―

いんば華子……………四九

若きオランダ医 ポンペ 香取淳……………六十



友よ

中川とら

あなたに初めて出会った日は

校庭の桜が散り始めた十五の春だった

北の国から来た、りんごほっぺの乙女は

黒髪のポニーテールを小気味よくゆらして

可愛かったよ

よく学び、よく跳ねて

やがて、あなたは病む人の支えとなって

巣立って行った

誇り高く、正直なそのうしろ姿を

見送ったのはわたし

わたしは家庭をもち、思い通りにならない

人生の試練に

幾度もためされ、こき使われながら

生きた四十数年

シングルでいきいきとキャリアを重ね

働くあなたがうらやましかった

性格も生きた場所も型も違うわたし達

再び交流し合ったのは

あなたが定年退職してから

なつかしい下町の老舗レストラン

術後のあなたは痩せこけて

頼りなげな声で近況を語る

わたしは心の中で泣いた

それから 毎年葉桜の頃

わたし達は、同じ場所で会い食事をし

語り合った

今あなたはふつくと肉がつき

やがて迎える喜寿を

大きな声で笑いながら讃える

平凡でつましかった互いの人生は

汗と涙と時に赤い血も流した

しかし

その軌跡は誰に恥じることのない

たのもしなものだ

友よ、どうか元気で

生命ある限り強く生きよう

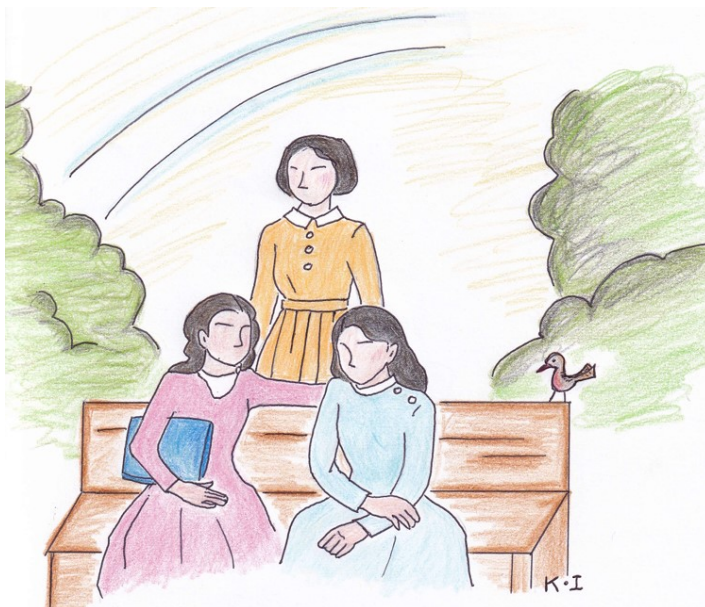
なにがあっても

毎年、あなたの健康な声が聞きたい

そう

明日、わたしは免許更新の認知機能検査をうけます

当然、合格は間違いありません



命ミッション その4

安達 真魚



碓氷峠 めがね橋 (2024.08)

Pictures in Memories

明滅 冥滅

思い出の空間

画像 自画像

閉ざされた空間

甦る 今は遠いあの日

さよならも言えなかった

スマホのなかの 彷徨うセピア色

微笑んだ瞳 何か問いかける

Pictures in Memories

Somebody to be there

今ここに 誰かいるような

今でも 昔のように

燦爛 散乱

消え失せた時代

虚像 実像

廻りゆく時代

転生の 人も今はなくて

闇の中 消えていった

スマホのなかの 漂うフォトグラフ

思い出の中に 過去を呼び戻す

Pictures in Memories

Somebody to be there

今ここに 誰かいるような

今でも 昔のように

やり直せたら

彼女は行ってしまった

もう二度と戻らない

それでも心は 送り出せてない

どんな言葉が どんな景色が

君を笑顔にできたのだろう

いつかどこかで会おう

届かない言葉だとわかっている

無理にわすれることもない

自分へのなぐさめのために

あなたは帰る見知らぬ街へ

ついていけない 自分がいる

心の軽さは 落ち着いていない

どんなジョークが どんな慰めが

君の明るさ取り戻せたのだろうか

きつと幸せになるさ

なくしたものが大きすぎて

虚しさを乗り越えたくて

自分の気持ちを収めたくて

夕暮れの並木道 人ごみの中で
帰らないあの日に想いを寄せて

いまも少女は

下手の考え 休むに似たり
明日は明日の 風が吹く

愚かな考え 寝ぼけた言葉
まだまだ大人に なり切れてない

すりよる男は 世間を知らず
私の動きに 目を丸くする

親からもらった 取り柄忘れ

いまも少女は さ迷い歩く

優しい人 探していた
特別な人思ったのは あなただけ
特別だった あなただけ

You don't know me.
You don't know me.

怖いものは 何もない
たわ言 何度も繰り返している

後先わからず 能力不足
成熟していない あほたれ一人

育ちがいいのは 折り紙つきで
いまも少女は さ迷い歩く

思いやり いつも求めていた

いい人だった あなただけ

You don't know me.

You don't know me.

怖いものは 何もない

たわ言 何度も繰り返している

思い出のなかに

振り返らないで 淋しすぎる

枯葉の季節 向こう風沁みて

追いかけても 届かないあなた

やるせない想い 心は沈む

広げたメモ帳 思い出のなかに

隔たった時間 黄昏に朽ち果てる

したためたレター 宛てもなくて

読み返しては 哀しみ溢れて

痕跡（あとかた） もない えぐれた思い

永遠の別れ 伝えるように

古いメモ帳 追憶のなかに

過ぎ去った時間 寂しげに絶え果てる

陽春のとき 思い出のなかに

夢見た景色 思い出のなかに

安穏な日々 思い出のなかに

帰らぬ人 思い出のなかに・・・

目を閉じれば

なくしたものは 多かった
何度も何度も 傷ついて
何度も何度も つまづいた
おまえは誰と 問われても
答えはいつも 闇のなか

close your eyes

目を閉じれば 見えてくる
新しい世界 遠く彼方に

あなたに送る 特別の笑顔
涙はもうすぐ 乾くだろう

夢見ていたことは 多かった
何度も何度も 問いかけて
何度も何度も だまされた

計算づくで 考えて
答えを導き 出そうとした

Close your eyes

目を閉じれば 見えてくる
新しい自分 未来のフォルム

あなたはすぐに 乗り越えるだろう
たった一度の 命だから



菅平牧場

小説「東大闘争」

畑中康郎

それは爽やかな初夏が始まったばかりの頃だった。柔らかな光が注ぐ静かな平日の午後、僕は大学近くの喫茶店「エム」でボブ・デイルンの「風に吹かれて」を聴きながら、ぼんやりと独りコーヒーを味わっていた。これが僕にとっての最高の時間だった。孤独は精神の安定をもたらし、思索を深めさせてくれる。いつまでもそんな時間に浸っていたかった。

しかし何気なく窓際の一角に目をやったときだった。胸が急にときめいてしまい思考は中断された。そこにかつて僕が密かに思いを寄せた人がいたのだ。中学三年のときの同級生、佐波れい子だった。

れい子は一心不乱に何かを読んでいた。その真剣な様子に少しの間だったが、見とれてしまった。中学卒業以来五年が過ぎ、彼女はさらに知的で上品な大人の女性になっていた。憧れの女性だったから近づき難いものがあつたが、

勇気を出して彼女に近づき声を掛けた。

「佐波さん、お久しぶり」

彼女が驚いたように僕を見上げた。

「あらー、高瀬君じゃないの。お久しぶり。中学以来ね」
中学時代、ろくに親しい会話もなかったのに意外にも憶えていてくれた。僕は心底嬉しくなった。

「今、ひとりなの？」と彼女が訊いた。僕が肯くと「だったらここに座らない？」

目の前の空席を指差し、彼女が僕を会話に誘った。それで僕は思わず訊いてみた。

「佐波さん、君、大学は東大？」

「そうなの、私独文なの」

「あれー、そうか。僕は数学をやっている。同じ大学だったんだね。これまでまったく出会いがなかったのが不思議だね」

「現役だったの？」

「うん、なんとか滑り込んだ」

「じゃ、同じ三回生ね。それで高瀬君、将来は数学の研究

者になるの？」

「いや、まだわからない。選択肢のひとつだけだね。ところで佐波さんがいま読んでいるのはドイツ語だね」

「そうなの、トーマス・マンを原書で読んで、その感想を原文引用のうえドイツ語で書く課題が出ているのよ。それもこれからたったの二週間よ」

「それは大変だ。それじゃ僕邪魔だね」

「うん、いいのよ。高瀬君と話す方が楽しいもの」

それを聞いて心底感動した。彼女は僕に好感を持っていて、と思ったのだ。でもそんなことはない、思い違いだとすぐに否定した。中学の時、彼女にそんな感じは一切なかった。久しぶりだし珍しいから話したいだけなんだ。会ってすぐそんな感情が芽生えるはずもないし、それに恋愛感情はいまの僕にはまったくのご法度だ。自分は未熟だ。女性と付き合うなんて早すぎる、と考えた。それで心の動揺を隠すために話題を転じた。

「それでマンの作品のうちの何が課題なの？」

「魔の山なのよ。少しだけ説明するけど、この小説は療養

所に主人公のハンスが従兄を見舞うところから始まるでしょ。マンはハンスを療養所に当初三週間の予定を大幅に伸ばし七年滞在させて、隔離された空間の中であらゆる感情、つまり恋愛、自然、思想闘争を疑似体験させるの。人文主義と共産主義の対立も出てくる。最後は疑似空間から飛び出て、第一次大戦に応召する。マンは何を訴えたかったのか、今の私にはまだよくわからない。私なりに答えを出さねばならないの。やはり難題ね」

「僕も日本語訳で読んだけど難しいよな。何を訴えたいのか、いまひとつわからない。理解の鍵は自分がマンの立場になり切ることだけど、これがなかなか難しいよね」

その後、僕たちは取り止めのない話をしつつ、コーヒ一杯で随分と粘った。高校時代や大学のこれまでのことなどを話した。当時、僕たちは公立の中学に在籍し、名門高校を目指す雰囲気希薄だった。

彼女はそんな雰囲気の中でも流されず優秀で、当時県下一斉のアチーブメントテストがあったとき、これは通称ア・テストと言ったが、一科目五〇点合計九科目で四五〇

点満点のところ、彼女は四四〇点で学年のトップだった。僕は残念ながら四〇〇点にだいぶ届かなかった。

その後彼女は県内の私立高校に進学した。彼女から高校の名前を聞いたが、やはり名門だった。一方、僕は両親の薦めで一応進学校ではあったが、他県の公立高校を受験し、うまい具合に合格した。住居は高校の近くに下宿し独りで住んだ。その後東大を目指した。理由は東大卒の学歴が欲しかったからだ。今思えばつまらない功名心だった。

彼女の方は東大だからといって大した思い入れはなかったようだ。実力に見合う大学がたまたま東大だったに過ぎない。

それにしても中学時代の佐波れい子は学業において図抜けていた。と言って、勉強ばかりの所謂がり勉タイプではない。バレーボールが好きでクラブ活動に精を出し、放課後はよく仲間と運動していた。帰宅は夕飯時を過ぎるころが頻繁だったと仲間の女子から聞いた。いつ勉強するのだろう、と不思議に思ったものだ。勉強のコツもあるのだろうか、呑み込みが早く、やはり頭の出来が一般人、とく

に僕とはまったく違う。

彼女の素晴らしい点はそうした優秀な成績を決して鼻に掛けないところだった。成績がいいからと言ってそれが何なの、という感じだった。先生が皆の前で褒めると彼女はそれを嫌った。謙遜が過ぎると高慢になると言うが、彼女の場合は違った。

「先生、勉強の成績は各個人の問題だから褒めるのは止めてください。成績が良くてもそれは人格とまったくの別物です。人格だけを称揚の対象とすべきものだと思います」とはつきり言った。中学生の僕は彼女の発言がよくわからなかった。

彼女はスーパーウーマンだった。何をやっても他を超えていた。だが彼女には他人を優越したい気持ちはなかったようだ。すべてが自然なのである。当然、彼女は僕ら男子生徒の憧れの的になった。だがそれは憧れであって、誰一人として佐波れい子を本気で彼女にしたいと思う男子はいなかった。畏れ多かったのだ。当時の僕もれい子を遠くから見ているしかなかった。気軽に話す勇氣さえ出なかつ

たのだ。

そんな憧れの佐波れい子がいま目の前にいる。そして僕のことを会話に誘ってくれた。中学時代の彼女からはとても考えられなかった。こんなことが現実にあるのだろうか。これが嬉しくなくて何であろうか。このチャンスを生かさない手はない。どんな話題でもいいから、引き延ばして彼女と一緒にいる時間を少しでも長くしたい。何でもいい。とにかく話したいと思った。それで現在僕が抱えている悩みを口にしてみた。彼女が何と言ってくれるか、それが知りたかった。

「僕ね、未だに大層な思想とか主義主張を持ってないでいるんだ。所謂ノンポリなんだ」

すると彼女はサラリと言った。

「そんなことないわよ。思想とか主義主張なんてものを持つとそれに縛られるんじゃないかしら。その思想以外のものが受け入れられなくなってしまうと思うの。特に若いうちは危ないわ。尖鋭化しやすいと思うのよ。高じると暴力に変化するわ。自分が正しいと信じ込んでいるからそれ以

外のものが目に入らずにテロ行為にまで走ってしまうことだってあるのよ。そんなことより若いんだから広範に様々な考えを取り入れるべきよ。思想を固めるのは四〇代でいいんじゃない」

さすが佐波れい子だ。彼女の言うことに一理ある、と思った。二〇代の若いころから自分の頭の中を固める必要はないのかもしれない。

「佐波さんの言うとおりかもしれないな。ところでいま医学部の学生が抗議行動を起こして学内をデモ行進しているでしょ。僕も行動を起こすべきじゃないかと思っているんだ。いやこれは思想信条とは関係なくね。行動を起こさなければ何も経験できないし」

「うん、でも焦る必要はないわよ。彼らの行動は単に一年間インターンとして無給で働かねば国家試験の受験資格さえも得られないという不合理を正そうとする動きでしょ。無収入というのも不合理よ。彼らだって生活者だと思う。でも彼らのデモって自分たちの利害から出たことでしょ。高瀬君の課題には遠いんじゃない？」

「そうかもしれないけどさ。だけど心情的に十分理解できる。それにデモの参加人数は多い方がいいと思うし。医学部に在籍する僕の親友もこれから先のことを考えると気がじゃないと思うんだ。これまで先輩たちはインターンを無給でやってきたらしいからね。辛いと思うよ。彼らの立場に立つとね。純粹に正義感からそう思うんだ」

「でもそれにしても彼らの抗議運動は長いわね。今年の一月くらいからだから、もう半年近くになるんじゃない？」

「大学側もそろそろ黙っていらなくなるかもね」

僕たちはしばらく医学部の行動について話した。彼らの行動が受け入れられるか判断を許さない。大学側が伝統としてきたこれまでの制度を覆すことは容易ではない。

話は尽きそうもなかった。それで嬉しいことに二週間後の再会を約して別れた。そのころには彼女のトーマス・マンに関する課題も片付くだろう。

医学部騒動は六月に入って急展開を見せた。学生が総長室のある安田講堂を占拠したのだ。思い切った行動だった。

総長は大河内一男先生。卒業式の式辞であの有名な「諸君は太った豚になるよりも痩せたソクラテスになれ」という言葉を口にした、あの先生だ。

その大河内総長が身の危険を感じたのか、それとも大学の先行きにただならぬものを感じたのか、六月一五日に機動隊の導入要請をした。講堂内への機動隊突入は実際にはなかったものの、キャンパスが機動隊員であふれた。ふうにキャンパス内を機動隊員が歩いている。この光景はやはり異様だった。大学の自治がどこかに吹っ飛んだのだ。これが学生たちの態度をなお一層硬化させ、同じ二〇日には全学総決起集会が開催された。大河内総長と対話するためだった。しかし総長は集会の途中で体調不良を訴えて退席してしまった。学生たちは考えた。どうせなら総長が席に戻るまでここにしようということになった。立てこもりが本格化したのはそれからだった。抗議に参加した人数は大河内先生の思惑を大きく外れ、逆にその数を増やし始めた。同調者が他の大学からも集まってきた。急に膨れ上がったのだ。東大医学部の制度改正に他の大学は関係ないの

だが、学生たちが考えるあらゆる世間の悪に反対闘争を仕掛ける思いだったのだろう。純粹な正義感もあったであろうし、彼らの考える大学の自治や自由を抑圧する巨大な権威に対抗する思いもあった。学生たちは闘争に生きがいを感じ始めたのである。

ここに東大闘争全学共闘会議、通称東大全共闘がスタートした。東大全共闘はそのとき大学側が処分した医学生の処分撤回と機動隊導入に対する謝罪など全七項目の要求を掲げた。この闘争は、折しもベトナム戦争がエスカレートしていた時に各地の大学で反戦デモが高まりを見せており、その流れがこの闘争に火を点けたとも言える。

佐波れい子と会って以来、僕たちの話題は必ず医学部闘争になった。

「ねえ高瀬君、この騒動はどうなってしまうと思う？」

「僕には詳しいことは分からない。でも收拾に向かうとしたら大学側が改革案を示さないとダメだろうな」

「大学側が改革案を示すということは闘争を仕掛けた方

の勝ちね」

「そういうことになるね。だから簡単ではないと思うよ。講堂に立てこもるなどという暴力行為が功を奏してしまつたら皆が暴力行為を正当化してしまう」

「そうすると改革案が直ぐに出ないから自然に闘争は長期化するわね」

「そういうことだ。ところでトーマス・マンは完成したの？」

僕は医学部闘争から話を逸らしたかった。何も闘争に参加していない自分が不甲斐ない存在と思っていたからだ。ノンポリの自分を責めていた。

「お蔭様で。苦労したけど何とか指導教授の評価も得られたわ」

「そう。それはよかった。ところで何か他に面白い話はないかい？」

「私ね、同じドイツ語ということでマックス・ウェーバーのあの難解本『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に挑戦し始めたの」

「へー、凄いな。あれは経済学部生の必読書でしょ。相当に難解らしいよ」

「うん、確かに。でも私のような者でも何度も読んで分かってきたように思うの」

「れいちゃんはもともと頭がいいからな」

僕は何回か彼女と会っていつの間にか彼女をれいちゃんと呼び始めていた。これには自分でも驚いた。

「ううん、そんなことない。もっともっと勉強しなくてはならないと思う毎日よ」

「れいちゃんは凄いな。それで将来は何になるの？」

「分からないわ。でもいまのままじゃダメだと思っているの」

「君のような頭がいうえに知的欲求の強い人がさらに大きく伸びるんだろうな」

「買収被りよ。世間には本当に頭のいい人がいくらでもあるのよ。私なんか、その足元にも及ばない」

「分かったよ。とにかく君は凄いわ。ところでトーマス・マンのみならずとくに西欧文学を理解しようと思うなら

結局根底に流れるキリスト教精神を理解しなければならなと思うんだけど、それでマックス・ウェーバーに挑戦したということ？」

「ううん、必ずしもそうじゃない。ウェーバーはその著書で新教について触れているけど資本主義の起りの原因として語っているだけでキリスト教そのものに言及しているわけじゃないの」

「そうか、本の表題どおりなんだね」

僕は思わず佐波れい子を見つめた。すごい美人ではないが、その知的な美しさは男の心を惹きつけずにおかない。無理だろうが、僕も出来れば彼女を恋人にしたいと思った。すると自分の心に急に疚しいものを感じた。このまま行けば彼女の魅力に必ず負ける。愛情を感じてしまつてはまずいのだ。今の僕には勉強することが山のようにある。自分は何事につけ夢中になると他のことを忘れてしまう悪い傾向があった。いまは大学の学問が最優先だ。時間は限られている。

しかしそんな思いとは裏腹にどうしたものか、僕は次第

に矛盾する行動に身を投じようとしていた。ノンボリの反省もあったのか、医学部在籍の親友・斎藤康人に同情する気持ちが高じてきたのだ。斎藤は高校時代からの親友だった。何度も僕の下宿で夜通し語り合ったものだ。二人の話は幼少時からの思考経験に始まって、実に多岐にわたった。マルクス理論を彼から概略教えてもらったこともあったし、哲学的話題にも及んだ。中でも古代ローマの思想家・哲学者セネカの「人生の短さについて」をよく議論した。とにかく彼からは実に多くのことを学ばせてもらった。彼は同年代でありながら、僕の師のような存在だった。

斎藤康人は母子家庭の出身だった。そのため、学習塾には通わせてもらえなかった。猛勉強の末、高校のカリキュラムを徹底履修するだけで東大医学部に現役合格した。合格は母親のおかげだったと言える。何故なら斎藤にアルバイトなどは一切させず、とにかく勉強に専念できる環境を作ってくれた。入学後も貧しい家庭環境の中で相当無理をして、斎藤に仕送りを重ねてきた。だから彼は少しでも早く収入を得て働き詰めの母親を楽にさせねばならなかつ

た。仕送りをしたいのだが、いまのままではこれから先の一年間も無給のまま頑張らねばならない。これ以上の負担を母親に求めることは出来ないのだ。それなのに、彼らは教授たちの指示により学外の病院での夜間時勤務を多くさせられた。その報酬が裕福な教授たちの懐に入ってしまったのはどう考えても不合理で納得できない。僕は思想信条とは別に全くの正義感から、医学部生のためにこの闘争に参加したいと考えるようになった。それが斎藤康人に対する義侠心ではないのか、と思ったのだ。

僕はついにれい子に宣言した。

「僕ね、医学部の連中に連帯しようと思っている」

「え、そうなの。ついに行動に移すのね。高瀬君も医学部のインターン制度に怒りを覚えたんだ」

「そうなんだ。頭でっかちの無行動ではダメだと思った。行動で自分の気持ちを表現する。現場で経験しないと彼らの本当の悩みもわからないしね」

「えらいわ。私も一緒に講堂に立てこもうかしら。私も同じように正義感からそう思うわ」

僕は即座に否定した。

「ダメだよ。れいちゃんは女性だよ。危ない目に遭うかもしれない」

「大丈夫よ。暴力の現場は極力避けるつもりだから」

「いやそうはいかない。機動隊と衝突でもしてごらん。ケガするよ。六〇年安保の樺美智子さんみたいになったら大変だよ。とにかく何が起こるかわからない」

「そうかしら。ダメかな。じゃ私は高瀬君を陰で応援する」

「応援か。でも医学部の制度改正は自分の問題ではないけどね」

「いいのよ。とにかく関わるんだから、頑張らなければならぬわ」

そんな弾みで僕は安田講堂に立てこもる医学部の連中と行動を共にすることになった。

安田講堂に立てこもった後も僕は佐波れい子と例の喫茶店で頻繁に会った。彼女が僕に注ぐ眼も気力横溢、輝いているように見えた。もともと彼女は元気だったが、より

元気になったように見えた。喫茶店エムは東大生のたまり場のようなもので、立てこもりの連中もエムに多く集まった。そこで大いに議論を交わすのである。店のマスターも言っていたが、闘争は人間を活気づける。とくに権力側と対峙するとき、連帯意識は急激に高まるというのである。人間というものは共通の敵があつてこそ生きがいを感じるものなのだ。

講堂の中はさながら解放区の様相を呈した。学生たちはそこで自由を満喫しているように見えた。中にはギターを持ち込んで歌を歌っている者もいる。そこには圧倒的に青春があつた。僕も完全にそうした自由にのめり込んだ。数学の勉強よりもはるかに楽しかった。

れい子は差し入れを持って時折僕に会いに来た。仲間の学生から冷やかされた。「高瀬はいいな。あんな美人に思われて。こんなところからさっさと出て嫁にしちゃえよ」なんて言う奴もいた。でも本当に彼女は僕のが好きなんだろうか。いやそんなことはない。彼女のような才媛はもって彼女に相応しい男性がいるはずだ、と思った。いま

思うとこれが僕の弱気の部分だった。

講堂の中はまさに牧歌的な雰囲気になっていた。これで闘争と言えるのだろうか。ところが異変が起きた。八月一日、大学側からの告示が掲示板に張り出されたのだ。学生たちの意見を全く無視した、一方的な内容だった。講堂から出て早く学業に戻れという。たったそれだけだった。何ら学生側の主張を考慮していなかった。学生たちの反発は一層高まった。牧歌的雰囲気は一掃され、バリケードが築かれ完全な闘争状態に突入した。大河内体制ではどうにもならないことがはっきりした。代わって総長代行に就任したのが加藤一郎法学部教授だった。大河内先生は限界を悟って自ら総長の任を降りたのだろう。

しかし加藤総長代行になっても事態は好転しなかった。ズルズルと時間ばかりが経過した。そして早くも年の瀬になった。加藤先生は東大を心の底から憂えていた。東大を愛していたのだ。自民党の中には東大崩壊論まで出てきたというから焦りも尋常ではない。このままでは東大が危ない。何としても東大を守りたい。

しかし時は容赦なく過ぎた。業を煮やした加藤代行は、年の開けた一九六九年一月一日、秩父宮ラクビー場を借り切って全学対話集会、所謂七学部集会を開いた。それで事態の打開を図ったのだ。が、それも結局ムダに終わった。そのころには、さすがに不合理なインターンの無給制度は廃止と決まった。集会の前年のことだった。それでも安田講堂から学生たちは退去しなかった。大学の自治というさらに大きな問題が未解決になっていたからだ。

結局、七学部集会は東大全共闘が乱入し、集会の妨害をした。権力側の態度にさしたる変化もなかったから学生たちが歩み寄るはずもなかったのだ。相変わらず、「諸君は本来の学問の場へ戻れ」、この一辺倒だった。物別れに終わるのは当然だった。大学側はどうしても無為無策なのだろう。事態は変化しているのに過去のやり方うまくいっていたと思うとなかなか変えることが出来ない。加藤代行は焦った。間もなく入試の時期になる。一次試験は三月早々だ。今結論を出さねば到底間に合わない。絶対に入試は実行しなければならない。そうでなければ東大が解体

される。政府側からは一月一五日までに事態の決着を求めてきた。しかし間に合わなかった。

ここに至って加藤代行は最後の手段を取った。大河内総長のときの六月は失敗したが、今度は失敗しないつもりで再度の機動隊突入を要請したのだ。それによって学生を安田講堂から排除し学内を正常化させたい、そう考えた。

そしてついに突入前日の一七日、加藤代行から学生たちに通知がなされた。

「明日、一八日をもって安田講堂へ機動隊が突入する。諸君は講堂から速やかに退去してほしい」

突入を通告された学生たちはやはり一様に驚き、動揺した。いよいよ本格的な戦闘になる。リーダーが悲壮な面持ちで僕ら全員を集め、演説した。

「いよいよ明日、機動隊がここに突入する。昨年六月に続く権力側の暴挙だ。我々大学の自治を踏みにじる行為だ。到底容認できない。我々はこれまで制度改革に向けて精一杯の努力を傾注してきた。一応、インターンの無給制度は昨年廃止となった。一定の成果だが、まだ我々はこんなこ

とには満足していない。改善すべきものは山積している。このままでは不完全燃焼で終わる可能性が高い。明日の戦闘は当然激しいものになるだろう。それでも我々は前を向いて走らねばならない。

いま我々が手にしている武器は火炎瓶、角材、街路から剥がした投石用の石だけだ。対する機動隊は催涙弾が主力になるだろう。他に武器もあるだろう。非常に多くの隊員も投入されるに違いない。しかも相手はプロだ。我々のうちからケガ人も大勢出るかもしれぬ。よってここに宣言する。ここから出たい者は遠慮せずに出て行ってほしい。残ることを強制しない。退去する者を決して卑怯者とも裏切り者とも思わない。選択は自由だ。最後にこれだけは言いたい。これまで半年以上にわたって安田講堂に立てこもり行動を共にしてきた仲間に感謝したい」

僕は悩んだ。選択肢は二つだ。安田講堂と一緒に闘ってきた斎藤康人と相談した。だが斎藤の場合、その結論は始めから決まっている。警察と衝突して逮捕されたら、医者としての人生を棒に振る。彼の場合、むしろ真っ先に講堂

を出るべきなのだ。当然の行動と思う。何しろデモを開始した当初は機動隊と衝突する事態を想像出来たであろうか。彼らはインターンの無給を改善してほしいだけだったのだ。しかもこの問題はすでに解決済みだ。自分だけければいいという態度は彼にとって恥ずべきことだったが、背に腹は代えられない。

問題は僕だ。講堂に立てこもったのは、医学部だけの問題ではなく、もっと大きく広く、権威に対する抗議が根底にあった。日本の大学の雄である東大の学生として何らかの行動を起こす必要があったのだ。大きく構えれば使命感だ。そこで考えたのは逮捕された場合の影響は斎藤に比べて断然軽微だということだ。

しかし反面、そうは言っても公務執行妨害で逮捕されれば大学から処分されるだろう。そうなれば僕の前途は暗いものになる。退学もあり得る。東大の学歴が欲しくてこれまで努力してきたと言ってもいい。ならば、ここを出るか。しかしそれではここまで共闘してきた仲間を裏切ることになる。他方卑怯かもしれないが、自分を安全圏に置くこ

とは出来る。リーダーは裏切り者とは見なさないと言ってくれた。さてどうする。僕はギリギリまで悩んだ。

そして情けないことに電話でれい子を喫茶店エムに呼び出し、相談に乗ってもらうことにした。僕の弱いところは肝心な時に自分で決断できないところなのだ。

夕方、彼女はエムに来てくれた。僕が頼むといつも快く応じてくれる。そしていつも僕に優しい面差しを投げてくれる。

「れいちゃん、いますごく悩んでいる。明日機動隊が講堂に突入することになった」

「えっ、そうなの。大変なことになったわね。高瀬君、それでどうするつもり？」

れい子は顔色を変えて僕の心配をしてくれた。僕は確信した。この人は僕にとっていまやかけがいのない、大切な人だ。

「リーダーは講堂から出たければ出てよい、と言ってくれた。しかも裏切り者とは見なさない」とまで言った。実はね、医学部の親友も闘争に加わっていたのだが、彼も離脱する

と言っていた。彼の場合はよくわかる。医学部で六年間履修しないと医師免許さえ取得できないからね。第一、彼の母親に申し訳が立たない」

「そうなの。でも高瀬君だつて同じよ。卒業資格は大切よ。だからリーダーの言葉は有難いのよ。講堂を出るほうがいいわ。でも講堂から出ることによつて高瀬君の心に傷は残らない？ 私それが心配だわ」

僕は急に赤穂浪士のことを思い出した。同じ浅野家の家老でありながら、一方は主君の敵討ちに命を捧げた大石内蔵助。片や身の回りの金品を持つて遁走した大野九郎兵衛。僕はずっと大野九郎兵衛を軽蔑してきた。講堂を出れば、大野と同じことになる。

「傷は残るかもしれない。それで悩んでいるんだ」

「でも、よく考えてね。これまで東大全共闘がやってきたことで大学という権威に何か大きな一石を投じるようなものはあったの？ 勿論、当初の目標だった、インターンの無給制度廃止は一定の成果よ」

そう言われて改めて気づいた。リーダーの言う通り、無

給制度廃止は一定の成果として評価できるものの大学の雄として目指してきた、さらなる大きな成果がないのである。結局、自己満足のために講堂を占拠し、講堂の中で牧歌的な自由を満喫して青春を謳歌した。それだけではなかったか。

「いや、それ以上に大きな成果はなかったかもしれない」「だったら、割り切ることも必要かもしれないわね。つまりリーダーの言うように講堂から退去するのよ」

僕は情けない男だった。れい子からそう言ってもらうことを期待していたのだ。彼女なら僕にやさしい言葉を掛けてくれる。そう期待していたのだ。退去すれば僕は無傷のままでいられる。折角東大に入学したのに警察に逮捕され、退学処分にならなったら両親に申し訳が立たない。それ以上自分自身でも東大卒の学歴が欲しかったし、十分に未練もあった。これから現れる多くのライバルたちよりも優位に立てる。今思うとそんな卑小な思いが安田講堂から僕を結局退去させた。佐波れい子のようにドイツ文学を心底やりたい人と東大に入る動機がまったく異なっていた。

翌日、僕は情けないことに闘いの様子をテレビで見た。完全な野次馬に転落したのだ。リーダーの通告に従わずに講堂内に残ったのは当初の千名から大きく減って六百名余りだった。対する機動隊は八千五百名。圧倒的な差だ。しかし学生たちは果敢に立ち向かった。彼らは本当に勇気ある人々だった。

一月一八日午前六時五〇分、闘いが始まった。投石と火炎瓶そして機動隊からは催涙弾が発射された。あちらこちらで炎が上がった。さながら戦場のような様相を呈した。機動隊は東大構内に築かれた各所のバリケードを一つひとつ崩して行った。激戦となったのは、安田講堂に到る道の入り口、その直ぐ右側にあった工学部の列品館だった。そこに明大からの応援部隊が陣取っていた。盛んに投石をした。そしてついに放火までした。すると突然、機動隊から催涙弾が放たれ、それが一人の学生の顔を直撃した。学生はうずくまり立てなくなった。見ると右目眼球が飛び出ており、重傷だった。それを見た、明大のリーダーはつ

いに観念した。機動隊には勝てないと判断したのだ。そして武器を捨て、両手を上げ、機動隊の前に無条件降伏したのだった。

僕はその学生に申し訳のない思いで胸がいっぱいになった。東大の問題には無関係の明大の学生が負傷したのだ。僕は心の中でごめんと呟いた。機動隊の中にも全身大やけどを負った隊員もいた。

結局、一八日はそれで終わった。本丸の講堂は持ちこたえたのだ。しかし翌日になって機動隊の攻撃は熾烈を極めた。それは警察権力の威信を賭けた闘いとなった。高圧水放射器までが導入された。これが寒空の下、学生たちの体温を奪った。学生側の武器は次第に枯渇した。投石用の石も角材も火炎瓶もなくなった。そして疲労も溜まり、水放射による体温の低下は確実に気力も奪った。もはや闘争は続行不能になった。午後二時三〇分、ついに闘争を放棄し全員投降。ここに闘いは終わった。

僕はここまでの闘いを総括した。学生側に成果として残ったものは何であったか。インターン制度廃止以外に成果

はなかった。それが当初の目的だったかもしれないが、次第に全国の大学の雄として国家権力に対峙するという大きな目標が出来た。しかしそれについては何ら達成できず、学生たちは敗北と結論付けたのだった。

加藤総長代行が最後まで固執した、東大入試はどうとう闘争終了後に現地視察した佐藤栄作首相によつて中止の指示が出された。

僕は闘いの終わった翌日、喫茶店エムにれい子呼び出した。体に傷を負うことはなかったが、僕の心はズタズタだった。リーダーは講堂を去った者に対して、決して裏切り者とは呼ばないと言ってくれた。しかし闘争に参加していながら途中で投げ出した自分を許すことが出来なくなっていた。一方でリーダーは公務執行妨害、凶器準備集合罪、不退去罪などで逮捕され、他の大学から支援してくれた学生の多くも同じように逮捕された。逮捕者は総勢三七七名となった。彼らこそ真の勇者だと思った。そう考えると僕の状態は最悪だった。そんな心の中を見透かした

のか、れい子がこう言った。

「人生、いろいろ辛いことがあるわよ。今回のことも長い人生の最初の試練かもしれないわね。いい人生勉強になったと思つて堂々と立ち直つてね」

堂々とは、悪びれることなく前を向くということだろう。彼女の気持ちが心底嬉しかった。そうだ、これからもっと辛うと辛いことが長い人生のうちに何度も起こる。彼女の言葉で僕は俄然勇気づけられた。ならば、僕のやることは数学の徹底研究だ。

「れいちゃん、有難う。これからお互い、勉学に精を出そう」

彼女は笑顔で、「よかった」と言ってくれた。

それからの僕たちは僕が理学部、彼女が文学部で一層勉学にのめり込んだ。とくに僕はこれまでの東大全共闘の活動を忘れたい一心で本来の勉強に邁進した。

学生生活も残り一年となった。喫茶店エムの佐波れい子とのデートも回数が激減した。数か月に一度僕の方からエムで雑談したいと誘った。その一方で、ただの一度だった

が、今思うと意味深長な誘いが彼女からあった。気分転換に温泉に浸かり富士山を二人で見ようというものだった。今思うことは彼女には僕を生涯のパートナーにしたい気持ちがあったのではないか。しかし僕は多忙を理由に断った。何が多忙なものか、数学の勉強なんていつでもできたはずなのだ。

そして卒業の日を迎えた。彼女はドイツへの留学を決めた。僕は東大に残るべくまず大学院に進学する道を選択した。卒業後しばらく経ったところ、出国の準備中だったのにれい子から突然、僕に電話があった。電話口で彼女はこう言った。

「私、これからドイツに行ってしまうけど高瀬君寂しくない？ 私いなくなるけどそれでよかったの？」

僕はこの言葉ですぐに気づくべきだった。彼女は僕にドイツ行きを止めてほしかったのだ。しかし僕は止めなかった。なぜなら僕にはまだまだ勉強しなければならないことが山ほどあったからだ。女性と関わって貴重な時間を失うことの恐さが心の中で先行した。目に見えぬライバルたち

に負けたくなかったのだ。僕はバカで、こう言ったのだ。
「お互い、その道の研究で頑張ろう。れいちゃんはドイツ文学者になるんだよね」

彼女の声から元気が失われたように思えた。

「そうね。私も頑張るわ。じゃさよなら。元気でね」
そう言って、彼女は日本を去った。

大学院に進学してからの僕は今まで以上に勉強に精を出した。ライバルが費やす時間の倍は優に頑張った。頭の中は数学しかなかった。寝ても覚めても、食事中も数学のことで頭がいっぱいになった。今の若い時期だからこそ頭を鍛える絶好の時期なのだ。過去古今東西の偉大な数学者の業績を徹底的に研究した。どうしてそのヒントを得たのかについて、自分ならどのようにトレースするか、白紙から研究した。その結果、彼らの頭脳の使い方の一端が分かったように思う。とにかく時間だった。時間をかけねば彼らにとても追いつかない。しかしそれだけでは勿論ダメだ。難問として数学史に残る諸問題に取り組みそれを解決する糸口を発見することも数学者として世に名を成すため

に必要だった。大それたことだったが、僕のような無知蒙昧な人間は時にこういう無茶なことをする。リーマン予想とかフェルマーの最終定理といった超難問に挑戦したのだ。ついでに述べると、リーマン予想とはドイツの天才数学者のベルンハルト・リーマンが一八五九年に提唱した、素数に関わる数学上の超難問である。素数は無限に表れるがそこに規則性を発見できれば、宇宙の成り立ちあるいは神の意思が解明できると考えた。具体的には、ゼータ関数における非自明のゼロ点はすべて一直線上にあるはずだ、という予想。しかし現在、誰もこの証明が出来ていない。一方フェルマーの最終定理とは、一六三七年フランスの数学者ピエール・ド・フェルマーが提唱した超難問で「 X の N 乗と Y の N 乗の和が Z の N 乗に等しいとき N は3以上の自然数では成立しない」とする。予想ともいえる。これらの超難問は僕の頭ではまったく解決不能だった。いくら努力しても数学上のインスピレーションは僕の頭にまったく生まれなかった。

なお、フェルマーの最終定理は、フェルマーが提唱して

以来三五八年後の一九九五年にイギリスの数学者アンドリュー・ワイルズによって証明された。そのときの僕にとってずっと未来の話だった。

僕には数学の才能がない、と気づいたのは数年が過ぎたころだ。それから数学への情熱が徐々に衰微し、脱力していった。このまま大学院に残ったとしても大きな業績は望めない。それならば、大学院を途中で終わりにすべきとの結論に達した。諦めが早いと言われそうだが、そんなことはない。才能は生まれたときから決まっており、どうあがいてもダメなものはダメなのだ。努力した結果、単にそれがわかっただけだ。

ただ数学そのものが好きだったから、数学とこれからも付き合っていきたい。それなら数学を学生に教える立場になつたらいい。それで僕は決心した。大学受験生のための予備校講師が最適ではないのかと考えたのだ。受験程度の数学ならば、どんなにひねった問題であつてもすべて解ける。それは当然のことだ。

僕は二五歳のまだ大学院生だったとき、親の薦めで見合

い結婚をした。嫁は都内の有名女子大の卒業生で、僕の学歴を知ると、それだけで結婚を承諾したような女だった。ところが、就職先が大学の教員ではなくて予備校講師になったことで次第に僕に対する態度が冷えていったように思えた。それは決して僕の思い過ごしではない。それから三〇数年、気が強いうえに気位も高く、上流意識の旺盛な妻とあまり楽しくない結婚生活をズルズルと続けた。あの時佐波れい子のドイツ行きを止めていればどんな人生が待っていただろうか。それが僕の強い後悔となった。何度れい子のことを思ったことか。僕は狡く気が弱い人間だった。自分から彼女を探しにドイツまで行けなかったのだ。僕はどこまでも中途半端で臆病な人間だった。いまの妻と別れてでもドイツに彼女を探しに行くべきだったのに出来なかった。自分が幸せになるための戦いを放棄したのだ。

佐波れい子について、その後分かったことがある。外科医に成長した斎藤康人がドイツで開催された国際外科学会に出席した折、優秀な日本文学者の噂を聞いたのだ。それが彼女だった。斎藤は同じ日本人として誇りに思うと

僕に伝えてきた。れい子はドイツの大学にそのまま職を得て、学生に日本文学を教えているとのことだった。それも源氏物語などの古典文学だという。彼女だったら、その程度のことは容易だろう。とにかく僕と違って頭の出来が違う。勿論、ドイツ文学の日本語訳も手掛けているという。日本語も美しく巧みだったから、当然その翻訳も一流だろう。いずれ僕も彼女の翻訳本を読みたいと思っている。

そして何より彼女は人柄がいい。優しく明るい。だから誰からも好かれた。そんな彼女が独身を通した。勿論、僕が原因ではない。が、もしもあの時、とまた思ってしまう。彼女と一緒にになっていたら、僕の人生はどんなにか幸せだったし、大きく成長もできたであろう。少なくとも日々ストレスを抱えて生きることとはなかった。彼女という素晴らしい女性よりも数学を優先したことが僕の人生の大きな失敗だった。数学は後で何とでもなるが、れい子との愛はその時が全てだったのだ。

人生に悔いのない人は恐らくいない。いるかもしれないが限りなく少ない。そして僕にとってのもう一つの後悔は、

こだわることではないが、安田講堂からあの時退去したことだ。もしも退去せずリーダーとともに最後まで闘争を続けていたら僕の人生はどうか。多分、大学を退く形になったであろうが、そんなことは些事だ。自分を飾る看板がなくなるから、かえって自分もつと世間を自由に歩き、冒険できたに違いなかった。このほうがずっと僕の人生を面白くしたと思う。そしてきつと自信を持って堂々と人生を歩めたことだろう。結局、僕は東大卒の学歴にこだわって失敗したのだ。何故こだわったのか、それは他人への優越感と他人から注がれるリスクの感情を潜在的に求める気持ちが強かったからだ。実につまらないものだった。人間性を高めるための学問探求から遠く外れていたのだ。佐波れい子の姿勢こそが本物だった。

そんな卑小な動機よりも人としての誠の道を歩いた方がよかった。リーダーは結局退学し大学には戻らなかった。その後は逮捕された他のメンバーとともに裁判を闘った。僕も退去しなかったら裁判と一緒に闘い、斎藤は別として彼らとも真の付き合いが出来たことであろう。誠の人間と

の付き合いは心に響く真の喜びであるし人生に彩を与えてくれるもののなのだ。

リーダーは裁判が結審した後、システム開発の分野で起業し成功した。これが本当の生き方だ。後になって偶然会う機会があり、人生の感想を訊いた。すると彼は何の屈託もなく、面白い人生だったよと言った。

東大卒という学歴、そんなものに捉われなかったリーダーはやはり立派だったと思う。学歴で人生を渡る気なんて全くない人だった。さらには一度歩き始めた道を楽な方に妥協しない人。茨の道を乗り越えた先の真の喜びがわかっている、それを目指せる人だった。僕はリーダーを今でも尊敬している。

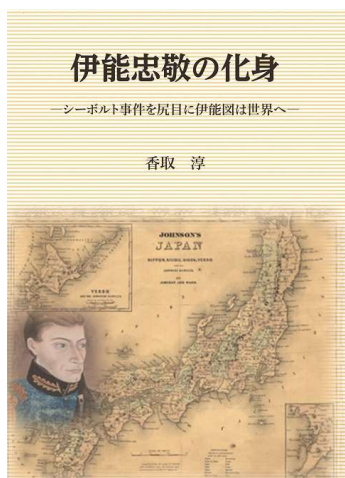
(了)

(あとがき) 本稿は昭和四三年一月から四四年一月にかけて実際に起きた東大における学生たちの闘争の記録を参考に創作したものです。

【コラム】

本誌第24〜26号に連載した香取 淳の歴史小説「伊能忠敬の化身」がPOD(Print On Demand)および電子書籍の形で十一月に出版されました。出版に当たり、サブタイトル「シーボルト事件を尻目に伊能図は世界へ」を付記したほか、次のような加筆・修正をしています。

- ・シーボルトの妻タキについて、出島が女人禁制であったため、名義上の遊女となって入島したこと。
- ・座礁したハウトマン号を浮上させた人物名の訂正。
- ・フランスで見つかった伊能図にまつわるエピソードの追加。



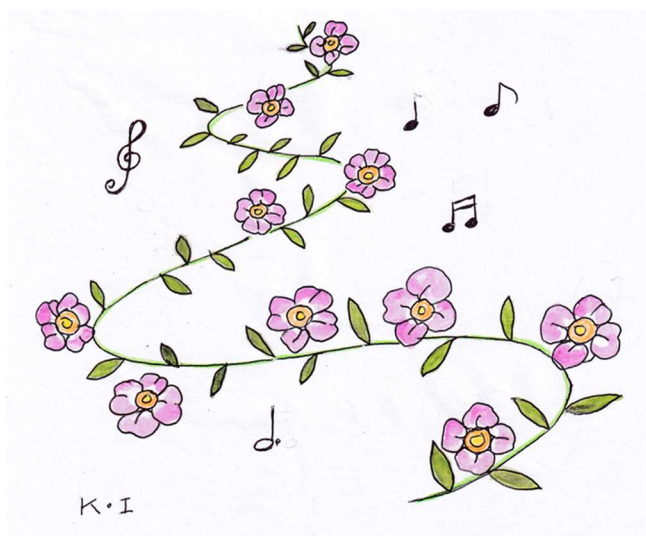
製本版(POD) ; Amazon より
電子書籍 ; Amazon 他十数社

「印旛文学の会」について

- ・ 本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に二回発行する等の文芸活動を行う。
- ・ 文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトに全文を発表する。
- ・ 会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し発表する者とする。
- ・ 会員は、年会費千円を負担すること。年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。
- ・ 会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。
- ・ 作品の長さについては特に規定しないが、一回に掲載できる枚数は、原稿用紙で一〇〇枚以内とする。
- ・ その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

限りある時間

中川 たら



いくつくらいの時だっただろう。

「死ぬ」ために生まれてきたと思うようになった。

はつきりした自覚はないが、少なくともまだ学校には行っていないと思う。

夕方になると思うのだ。「生まれてしまった」と。

直感だった。

人に話すことはなかった。が、その思いはいつも腹の底に横たわるように残り、一日が終わると「今日も一日、死ぬ日に近づいた」とぼんやり思った。

小学生になり、やるべきことがふえていくと、忙しさばかりが癪にさわり、面倒くさい。

周りの友人がはしゃぐ姿に、「何がそんなに楽しいの……」と気色わるい。

心の中は空っぽだった。

こんな気持ちをかかえながら生きていくのは、具合がわるいんじゃないだろうかと思ひ、この状態から抜け出したいと願った日が、あつたような気がする。

さぞかし、人が見たら、活気のないわたしは、変に大人びて覇気がなく、変わり者に見えただろう。

なぐさめは、一人で出来る事ばかりで、本を読む、音楽を聴く、映画を観る。植物の成長を観察する、そんなことぐらい。

そう時々、近くの土手に上がり、川の流れを無心にながめた日もよくあった。

こんな事があった。

小学一年生の夏休み。いつも早起きの母が、小さい声でまだふとんの中のわたしを起こした。

「蟬が羽化しているから、見れるわよ。来なさい。」
言われるまま、眠い目をこすり縁側に出たわたし。

母の指さす柿の木の枝に目をやった。

「どこ？」

浅露に濡れた木の枝が、やけにごつごつしている。

目をこらすと、確かにうす黄緑の透明色の新しい生命が、割れた幼虫の背中からまさに、今スッポリ抜け出たところだった。

体がしっとり濡れている。羽化したばかりだ。

「きれいでしょ。色がなんともいえないわね。」

母はひどく感動している。

わたしはだまっとうなずき、じっと見まもった。

どのくらいたっただろう。やがて、美しい羽根は大きく開き、蟬そのものの姿に変わった。

抜け殻は、しつかり樹皮をつかんで、いつまでも離れない。

それからわたしは、夏の終わりが近づく、樹の下を歩き、

蟬の抜け殻を捜して歩いた。

注意深く見ていくと、思いのほか拾うことができ、涼しい

風が吹く頃には、母が用意してくれた箱がいっぱいになった。

背中が大きく割れたそれらは、指でそつとかき回すと、カ

サカサと独特な音をたてる。

それがかわいくて、何度もやってみる。

そのうち、ふたをせず縁側に置いたまま忘れてしまうと、

箱の中は、からっぽになっていた。風にでも飛ばされてしまったのだろう。

小学校の最後の夏休みがおわり、二学期が始まったばかりだろうか。

いつも一緒に帰る友達が欠席で、ひとりぼっちだったので、いつもと違う道から帰ることにした。

道中、大きな古い寺がある。高い石垣の中は、背の高い樹木が生い繁り、夏ともなれば、蟬しぐれの境内だ。

木陰が広がっているぶん、あたり一帯がひんやりとしている。

石垣に沿って歩くと、蟬の抜け殻をたくさん拾えた。

ほどなく住宅地がつづく。

高い木が、何本も植えてある古いお屋敷のそばまで来た。

その家は、二階建てのようだが、よく見ると窓がついた小さな屋根裏部屋が載っている。

枝葉が窓をおおうようにして、中はわからない。

ふと、わたしは自分の首筋あたりに妙な人の気配を感じた。不安な思いで、少しドキドキしながらその窓を見上げた。確かに誰かがこちらを見ていたのだ。

小さな子供の影が、ずっと引つ込んで窓の引き戸が閉まった。

（わたしのことを見ていた……）

何とも言えない感情に動かされ、思わず夢中で走りだした。家につき、握りしめた手を開くと、拾った蟬の抜け殻が粉々になっていた。

それから何年かしてわかったことだが、あのお屋敷には病気がちでほとんど学校に行けなかった、かわいい一人娘さんがいたらしい。

子供だったわたしは、夏が終わるころになると、なぜかきまって生命の抜け殻を拾い、そして少し寂しい気持ちを味わった。

やがて、歳月が彩りを添え、二十歳過ぎた頃から「死」に向かつて行進しているという概念は、やがて自分の人生の大切な目標にかわった。

限りある人生だからこそ、何かをやりとげ、いい人生だったと思えるように生き抜きたいと考えるようになったのだ。

おわり

トワイライト世代 その5

安達 真魚



中尊寺金色堂 (2024. 3)

平泉

自分の出生地の近くに国宝白水阿弥陀堂がある。この建物は、平安時代末期、平泉の奥州藤原氏から岩城氏へ嫁いできた徳姫が西暦1166年に創建したといわれている。建物自体が中尊寺金色堂を模したものになっている。そんなことがあって、子供の頃から平泉には興味を持っていた。学生時代に一度訪れたことがあるが、金色堂の外観を見たくらいで、ほんの素通りに等しいものだった。

この春先に、日帰りで訪れる機会があったので、そのときに感じたことをまとめてみる。時間はあまりないので、中尊寺と毛越寺くらい行ければいいと考えた。ちょうど、東京国立博物館で建立900年特別展「中尊寺金色堂」が開催されている時期で、TVでも黄金に輝く金色堂が8KCGの技術で放映されていた頃であった。

上野から東北新幹線で一関駅まで行き、JR東北本線に乗り換え、二駅目が平泉駅だ。東北本線といっても、

2両編成で、一時間に1本程度のローカル線といえる路線だ。線路は、一関駅から平泉駅まで、北上川の低地を北北西に貫いている。両側には小高い山々が見え、自然に恵まれた、ゆったりした地域だと感じた。

平泉駅は大きな駅ではないが、駅周辺はやはり観光地の玄関口としての雰囲気があった。天気は曇り、平日で、観光シーズン前だったので、客はさほど多くはなかった。最初、中尊寺まで行こうとしたが、バスの便はなく、タクシーを呼ぶのに少し苦労した。駅から中尊寺までは、県道を北北西に向かい、参道入口を左折して、西北西方向へ丘陵地を上っていく。タクシーで、10分もかからない程度だ。

金色堂は、さすがに客の数は多い。内部はさほど広くないので、仏像などを間近に見ることができた。それらは、重厚で荘厳といった言葉がぴったりだった。創建当時の工芸技術を集約した姿が今凝縮して見えているという感じだ。堂内に流れる説明音声もわかりやすかったが、見ることに集中しているので、その音声さえも邪魔

にならないくらいだった。また、藤原4代のミイラが安置されているのは有名だが、見えないだけにあまり気にはならなかった。いずれにしても、期待通りの世界遺産であった。金色堂を出ると、すぐ近くに芭蕉の句碑があった。古くなって句碑の文字が判読できなくなっているが、逆に歴史を感じさせた。

五月雨を降り残してや光堂

中尊寺には、数多くの建物があるが、中尊寺本堂も人氣が高く、外国人を始め、多くの人を集めていた。本堂で一番気にかかったのは、ご本尊の釈迦如来坐像だ。新しく造顕されたものらしいが、金ピカなためか、何かアピール（訴求）する力がありそうに感じた。

次に訪れたのが、毛越寺だ。平泉駅から西方向に700～800mの平坦地にある。西側の丘陵地との際（きわ）に位置している。毛越寺は、藤原氏二代基衡から三代秀衡の時代に多くの伽藍が造営され、往時には堂塔40僧坊500を数え、中尊寺をしのぐほどの規模と華麗さであったといわれている。毛越寺南大門跡には、芭蕉、

直筆の句碑が残されている。

夏草や 兵どもが 夢の跡

毛越寺は、仏堂と苑池とが一体として配された浄土庭園で、周囲の山を背景として一体化させている。前述の国宝白水阿弥陀堂も浄土庭園であり、仏堂と苑池、周囲の山の配置は、同じ発想によるものと思う。「池越しに御堂を眺望する」スタイルだ。ただ、毛越寺は、隣接する観自在王院跡を含めて、規模ははるかに大きい。白水阿弥陀堂は、御堂の形を金色堂に模しているというのが特徴であるが、庭園様式については、毛越寺の様式が大きく影響していたのではないかと思っている。

毛越寺から平泉駅までは徒歩だった。途中、通り沿いに適当な店があったので、そこで昼食をとった。「麵房高松庵」という店だ。日本そばを「ちそう」になったが、一緒に「暮坪（くれつぽ）かぶ」という特産のカブも薬味としていただいた。店は、一人の男性で切り盛りしていたのだが、懇切丁寧に応接していただいた。とくにこのカブは大変貴重品らしく、味や産地など詳しく説明し

てもらった。あとで、この店をネット上で調べると、大変評判が良かったので、何か得したような気がした。

食後、観自在王院跡の北側に日帰り温泉があったので、旅の締めくくりに、立ち寄ることにした。平泉町健康福祉交流館の「悠久の湯 平泉温泉」だ。施設も整っていて、町営なので手頃な料金で利用できた。利用客の多くは地元の人のようなだった。泉質はナトリウム塩化物泉で、大浴場は広く、湯上り後は畳の休息所でゆっくり休むことができた。

温泉施設を出て、平泉駅までは遠くないので、町の景色を見ながら駅に向かった。その一帯は、全体に平坦で、区画整理がよくできている。やはり、観光地として整備することに気遣っていることがうかがわれた。銀行の建物で、金色堂を意識した意匠になっているものもあり、観光地らしさを感じた。平泉には、他に柳之御所遺跡、無量光院跡、高館義経堂など見どころが沢山あったのだろうが、当日はここまでであった。

平泉町は、現在、人口が7,000人に満たない町で

ある。住居できるエリアもさほど広くなさそう。往時、奥州随一の都市だった平泉の面影は感じられなかった。藤原清衡は、なぜ平泉の地に拠点を構えたのだろうか。それまでの拠点だった江刺から少しでも国府に近く、水運が良く、穀物栽培に適した土地だったからだろうか。平泉は、北上川に接しているし、衣川の河口も近い。平泉から一関にかけて、東北本線の東側は、大規模な米作地のような。平泉の町並みから、歴史的な想像力を掻き立てながら帰途についた。

インボイス制度

インボイス制度が昨年10月から導入された。この制度の導入によって、国にとっては、違法仕入れによる脱税防止や課税業者増による税収増など多くのメリットがあった。反面、インボイスの発行や会計処理の事務作業の増えた事業者、さらに新たに納税が必要となる小規模事業者など、影響を受けている人も多かったと思う。

とくに、免税事業者であった個人事業者は深刻な状況であつたろう。もともと消費税の免税は、消費税導入の反発を少しでも和らげることを目的としたものだったと思うが、この制度の導入で一番困っているのは、その小規模事業者だ。簡易課税を選択することもできるようであるが、インボイスを発行できないから、商売上、不利になるのが避けられない。

この制度の導入によって、大した影響ではないが、自分個人としても少しは面倒な作業が増えた。クレジットカード払いにしている経費について、すべて紙ベース化とし、デジタルでもネット上にアップされている請求書などの帳票をファイルとして用意しなければいけないことになったことだ。これまでは、自動で引き落としされる場合を含め、クレジットカードで支払えば、それで終わりだったのが、余計な作業が増えたことになった。確かにカード会社からの内訳書では不十分なのだろうが、効率から考えて、全く逆行した措置としかいえない。

インボイス制を導入して、課税を正確に行い、効率化

していこうとするのは、税の透明性と公正性から大きい賛成できる。ただ、導入の仕方に問題があったのではないだろうか。

まず、カード会社の内訳書に不足する情報を、カード会社が付加するようにシステムを変更し、それらを利用すればいいだけのことだ。不足する情報とは、売り上げを計上する会社の登録番号だけだ。ついだから、もう少し売上内容を詳細に記録する項目を追加してもいいだろう。今の時代、インボイス制はそのような手順を踏んでから導入すべきだったと思う。

それだけでなく、カード会社は、膨大な利益をあげている。システム変更は簡単ではないと思うが、カード会社にとってもメリットが大きいはずだ。今からでも、取り組んでいってほしいと思う。

インボイス制の導入に関連して感じるのは、歴史的にみて、行政側の課税スタンスは昔から一貫して変わっていないことだ。律令制における租庸調、墾田永年私財法、荘園制、太閤検地、明治の地租改正、日本国憲法の納税

義務、消費税の導入など、古来、徴税にまつわる変遷、変革は数多くあった。そんななかで、為政者側の徴税に対する強い意志だけは変わることではなく、新しい時代になっても、上から目線のスタイルは変わっていないように思う。

税金を徴収できなければ、国や自治体などが運営できないのは、昔も今も変わらないので、徴税をきちんと行うために権限行使するのは当然だ。ただ、問題なのは、そのときのスタイルだ。人権主義、民主主義の時代になっても、納税者に対する接し方は、根底で昔とあまり変わっていないように思う。例えば、江戸期に納税者側である名主が帳簿をとりまとめて申告し、年貢を取り立てられていた時代と基本的に変わっていない。現在でも、納税者側からすると、徴税担当者は「お上」である。滞納すれば、高い延滞税はかけられるし、脱税の疑いがあれば、税務調査に入られることもある。高い延滞税と税務調査は、言葉は不適切かもしれないが、円滑な納税のための、ある種の「脅し」になっている。

所得税などの税金は、自己申告が基本であるが、これ

が大きな問題である。交通違反の場合、違反すれば切符が切られ、そのとき始めて違反が認識され、罰金や反則金支払い義務が発生する。それに対して、税金の申告の場合、申告を失念したり、間違えたりしても、そのときは何のお咎めもなく、発覚した時点で、それまでの延滞税を支払うことになったり、罰則を受けたりする。発覚するまで何の認識もないのだ。それで税務署からは、「きちんと申告してください」ということになる。申告については、すべて納税者側の責任になっているのだ。一方で、仮に、申告に偽りや不正行為があり、課税者側がそれを見過ごし時効になったとしても、課税者側に何のペナルティも発生しないのが現実だろう。

個人の場合、消費税には申告がなく、買物のときに自動的に徴税されているだけだ。公的年金、健康保険、介護保険は、なぜか税金と呼ばないが、所轄官庁が違うだけで税金と同じだ。これらも金額は行政が計算するので、申告はない。

所得税だけは、確定申告が必要になる場合も多い。こ

れもせっかく導入したマイナンバーを活用して課税額を計算し、申告なしにしてもらった方がいい。制度やシステムの大きな変更が必要になり、時間もかかると思うので、実現が無理なことは承知だが、個人の場合の課税額は、できる限りデータを補足した行政側が計算する方向で考えてもらえたらいいと思う。

法人税や法人が支払う消費税でも同様で、最終的な課税額の決定は行政側の責任で行うのが理想だ。今のままでは、課税側の立場が強すぎる。思いつきで申し訳ないが、課税側と納税側が対等にたてるための仕組みとして、中立な第三者機関の「徴税審査会」のようなものがあってもいいのではないかと思う。

税金については、もう一つ大きな問題がある。税金の種類の数さと、複雑さだ。例えば、思いっくだけでも、所得税、法人税、相続税・贈与税、自動車税、自動車重量税、軽自動車税、ガソリン税、不動産取得税、固定資産税、酒税、たばこ税など数限りなくありそうだ。全部で50種類くらいあるらしい。冷静に見て、煩雑で異常としか思えない。この煩雑さを商売の糧にしている人も

多いだろう。「税金はとりやすいところからとる」という発想が、このような状態にしまったのだろうか。税金の有り様は、その時代の政策と密接に関わっているものだが、これらの体系や種類を整理していこうとする志のある人は、どこにもいないだろうか。

スマートウォッチ

少し古い調査だが、2021年スマートウォッチの所有率は38.0%（MMD研究所）で、スマートウォッチの普及は急速に進んでいるようだ。一方で、高級、装飾、一般向けの時計メーカーも、苦戦しながら生き残り戦略を模索しているようで、消費者としては、このような時計の多様化は歓迎すべきものである。

スマートウォッチで利用できる機能は、歩数計、LINE・メール・電話の通知、心拍測定、通話、消費カロリー、睡眠計測、音楽再生、GPSセンサー、モバイル決済、血圧計測など多岐にわたる。スマートウォッチを

購入した理由も、「健康管理をしたいから」を筆頭に、「好きなブランド・メーカーだから」、「スマートフォンとの連携性が良いから」、「スマートフォンを取り出さずにすむから」など数多くある。

自分としては、時間はいつも気にしているので、外出するときには、必ず腕時計をしていたいと思っている。自宅にいたときも、できるだけ多くの場所に掛け時計や置き時計を置いておくようにしている。ゴルフをプレイしているときも腕時計はしている。ロストボールになりそうなとき、「ボールを探し始めてから3分以内にボールが見つからない、もしくは自分のボールだと確認できなければロストボールになる」が、このようなケースのため、時計の携帯は必須だ。距離計測などゴルフプレイ向けのスマートウォッチも多く普及しているが、どんな種目でも、スポーツ用にはスマートウォッチがぴったりくる。

現在、自分が使用しているスマートウォッチは2台目

で、Amazon GTS 4 Miniという機種だ。多くの機種と同様に多機能で。とりあえず気に入っている。ただ、血圧や心電図測定などの機能はない。

スマートウォッチに一番求められる機能は、当たり前なことだが、「時を正確に表示すること」だと思う。加えて、多くの機能を持ったスマートウォッチであった方がいい。自分が現在のスマートウォッチを購入する際に考慮した主な選択基準は、次のとおりであった。

- ・常時点灯であること。1台目として購入したものは、常時点灯でなく、手首を返さないと点灯しなかった。
- ・デザインは、丸でも四角でもいいが、大型でなく、派手でないもの。手頃なサイズ感のもの。色は黒。
- ・血中酸素濃度が測定できるもの。
- ・バッテリーの持ちがよいもの。
- ・値段が手ごろなもの。

・決済機能、通話機能、音楽再生機能などは不要。これらの機能はスマホで十分だと思っている。少額決済も、スマホのSUICAで行っている。これらの機能を持つものは機種が限られ、価格もアップする。また、他の人

のスマートウォッチでの決済を見て、動作に不自然さを感じ、あまりスマートでないと思った。

現在のスマートウォッチを使用してから約1年になる。個人的な感想になるが、使い勝手などについて、まとめてみたい。

この種の精密機械の多くは、取り扱いを覚えるときが一番難しい。紙の取扱説明書が商品の箱の中に入っていないことが多いので、ネット上で探した説明書などを地道に読んでいくしかない。多くのスマートウォッチは、スマホと連携するので、ウォッチ本体とスマホアプリでの設定を行う必要がある。最初だけとはいえ、意外にストレスのある作業だ。ウォッチ本体と連携するスマホアプリには、それぞれに操作が必要であり、それらを覚えるのが大変なのはどのスマートウォッチでも多分同じであろう。

腕時計としては、小ぶりで地味なもので、購入前に想像していた通りであった。スマホのライブラリにある

写真をウォッチフェイス上に設定できるのは、大した機能ではないが、満足感が高い。残念なのは、デジタル表示したときに、秒の表示ができないことと、常時点灯とはいえ、昼間、屋外では、やや見えにくい点くらいだ。磁石式の専用の充電器が付属し、充電スピードも速く、電池の持ち時間も良いと思う。

（歩数計）

歩数の計測はスマホで十分であるが、ゴルフなどでスマホを身に着けないときでも計測できるメリットはある。また、室内でもウォッチを身に着けていれば、計測できる。意外に室内での歩数が多いことに気付かされる。

（心拍数）

これまで、自分の心拍数とか気にかけたことはなかったが、このウォッチを利用するようになってから、健康状態や、運動の強度を知る上で、心拍数の計測が非常に大切だということがわかった。

（PAI）

PAIは、ノルウェー科学技術大学医学部によって開発された健康指標数値で、性別や年齢、心拍数・日常の

アクティビティなどから計測される。PAIの7日間トータルスコアを「100」以上に維持できれば生活習慣病のリスクを大幅に軽減できることが実証されている。

このPAIは、何らかの運動をしなければ獲得できない。運動することで心拍数を上げ、それを維持すれば獲得できる。普通の歩くだけの散歩や筋トレでは獲得できず、有酸素運動である必要がある。階段上りやランニングは、効果的にPAIを獲得できる。ただ、とくに高齢者などは無理をしてはいけない。ランニングはその衝撃により腰を痛める恐れがある。日常の散歩では、通常歩行と早足歩行の繰り返しをPAI獲得のための理想的なパターンとしてお薦めできる。早足歩行100歩や200歩程度でも、十分な有酸素運動になる。運動なので、少し汗ばむくらいになることが大切のようだ。

PAIは、有酸素運動を意識する重要な数値だと思うのだが、これを採用しているメーカーが、Amazon、Xiaomiなどに限られている。他のメーカーは別の指標を用意しているのかもしれない。

（睡眠）

睡眠時にウォッチを装着していれば、起床後、睡眠の状態をスマホでグラフィカルに把握することができる。入眠時間、起床時間と途中の覚醒、深い眠り、浅い眠り、REMの各時間帯および心拍数の推移が表示される。睡眠時の心拍数は、入眠時から起床時に至るまで、ばらつきはあるものの、少しずつ低下していく傾向にあるもののようなのだ。

その日ごとに100点満点の点数と、ユーザー全体のヒストグラムのなかで、自分の位置が表示されるのでわかりやすい。90点以上だとオプティマル（最上）が表示されるので気分が良い。しかし、この90点以上をとるのが、なかなか難しい。点数の計算根拠が詳細には示されているわけではないが、傾向はおおよそわかっているもので、自分の睡眠の質をあげるためにも、記録しておきたい。

- ・ 全体の睡眠時間は長い方がよい。
- ・ 深い眠りの合計時間は長い方がよい。この時間の長さが点数決定に一番影響するようだ。
- ・ 覚醒の回数や時間帯は、少ない方がよい。

対策としては以下のことを心がける必要がある。

- ① 1日の運動量をできるだけ多くする。前述のPAIを多めに獲得した日は、点数が高いことが多い。
- ② 昼寝の時間は20分以内にしろとよく言われるが、これを守る。また夕食後は、寝ないようにする。夕食後に寝てしまうと、本来の夜の睡眠には悪影響を与える。とくに寝付きが悪くなる。

- ③ 入眠時間が遅くならないようにする。また、一定時間には起床するようにする。

抜本的な睡眠対策は難しいものがあり、各個人それぞれ、有効な対策を考えていると思う。睡眠に関する書籍も数多く出版されているので、それらも参考にした方がいいだろう。

（血中酸素濃度）

以前、軽度の睡眠時無呼吸症候群と診断されたことがあったので、血中酸素濃度が計測できるスマートウォッチには興味があった。少し前は、血中酸素濃度計測に対応するスマートウォッチは少なかったし、あっても高価であった。現在は低価格のスマートウォッチでも当たり

前のように血中酸素濃度計測機能を持つものが多い。この機能があれば、簡便なパルスオキシメーターを持っているようなもので、安心だ。自分の睡眠時の血中酸素濃度計測値は91〜99%に分布し、時間当たりの低呼吸回数もさほど多くないので、あまり問題はなさそうに感じた。

現在使用しているスマートウォッチだけでも、他にストレスの強度の表示や、アクティビティ関連など、多くの機能があり、まだまだ利用しきれていないとはいえない状況だ。スマートウォッチは医療用に活用されるなど、これからも普及率をあげていくだろうが、個人的には、一つの楽しみとして、つきあっていければいいと思っている。

アーチェリー

若い頃に、なぜかアーチェリーというスポーツに興味を持っていたときがあった。弓での的を射るということはわかっていたが、実際に見たこともなかったし、周囲に誰かプレイする人などいなかった。ただ、沿道にフィールドアーチェリーの看板を見かけたことがあったし、船橋市の国道296号沿いには古くからアーチェリー場があつて、それが気にかかっていたこともあった。少し前に、軽井沢のリゾート施設の遊戯場でアーチェリーをする機会があった。貸弓と一回10本程度の貸矢で、プレイしたのだが、10m先の的にまともに当たらなかった。そのときのことばかりで、改めてアーチェリーに興味を持つようになり、プレイしてみたくなった。遊びでもいいから、どうすればプレイできるのか、調べ始めるようになった。

ネット上で調べる限り、千葉県には、有料のアーチェリー場は、佐倉市にあるフィールドアスレチック場と、

前述の船橋のアーチェリー場の二つしか見当たらなかった。一方、千葉県には、千葉県アーチェリー協会があり、その加盟団体に、市レベルのアーチェリー協会と一般のアーチェリークラブが、合わせて15くらいの団体があった。残念なことに、自宅の近くには有料のアーチェリー場もアーチェリー団体もないことがわかった。

しばらくは諦めていたが、ある市のアーチェリー協会の初心者教室が目に残り、それを受講することで、念願のアーチェリープレイが実現した。初心者が練習をするのは、市の体育館であるが、車で片道1時間くらいはかかるのが難点だ。週1回、それも休むことも多いが、これまで1年くらい継続している。

どんなスポーツでも同じだが、アーチェリーも意外と難しく、なかなか上達していない。それでも、知識だけは少しずつ増えていく。どんなスポーツなのか簡単に説明しておく。

アーチェリーは、弓で標的に向かって矢を放ち、矢が当たった標的上の得点を争う競技だ。得点は標的の中心

の方が高く、所定の射的数の合計点数を競う。標的には、中心から外に向かつて通常10点から1点まで配置され、同心円状に得点帯が色分けされて印刷されている。標的のサイズは、種目や距離などによって異なり、オリンピック競技では、的までの距離は70mであり、的のサイズは直径122cmの円となる。

次に、アーチェリーで使用する弓（ボウ）であるが、いくつかの種類があり、主な弓は以下の3種類だ。

① リカーブボウ

日本において最も普及しており、競技人口が最も多い。高体連や国体、オリンピックで競技として採用されている。弓本体（ハンドル、リム、弦）にサイトと呼ばれる照準器や弓を安定させるためのスタビライザー等多くのパーツを取り付ける。

② コンパウンドボウ

世界的にみて最も普及している弓だが、日本では利用者が少ない。偏心滑車の仕組みによって、弓を引く抵抗を少なくし、サイトスコープに拡大レンズを使用するなどして、的中精度を向上させている。

③ ペアボウ

弓自体はリカーブボウと共通のものだが、サイトやスタビライザーをはじめとした的中精度を向上させる道具の使用が著しく制限されている。文字通り裸の弓であり、原始的で伝統的な弓だ。最もお手軽に始められる。アーチェリー競技における種目も3種類あり、概説しておく。この3種類の種目に対して、それぞれ3種類の弓に対する種目を考えればいい。

① ターゲットアーチェリー

アウトドア・ターゲットアーチェリーの略。屋外の平坦な場所で開催される。最も一般的なアーチェリーである。標的までの距離は30m、50m、70mなどで行われる。オリンピック競技は、リカーブボウのみで、距離70mのターゲットアーチェリーが採用されている。

② フィールドアーチェリー

自然の地形を利用した場所に標的を設置して行われる競技で、コースは5mから60mくらいの距離に標的を設置した12個のポストから構成される。多くの場合INコースとOUTコースと呼ばれる2つのコースが

用意され、ゴルフラウンドのイメージに近い。標的の様子は、ターゲットアーチェリーとは異なる。

③ インドアアーチェリー

インドア・ターゲットアーチェリーの略。体育館などの屋内で冬場などに行われる。標的までの距離は18m、標的は直径40cmで、5点以下がない縦に三連の標的を使用する。

アーチェリーを始めて、やっと一年で、まだまだ経験としては不十分であるが、スポーツとしてのアーチェリーの特性などについて感じたことをまとめてみる。

① ゴルフやテニスなどに比べて、マイナーなスポーツだ。比較として、アーチェリーを含む日本でのスポーツ競技人口の例をあげる。ゴルフ856万、サッカー309万、野球268万、バスケットボール237万、バレーボール217万（笹川スポーツ財団2022年度）、テニス343万（公益財団法人日本テニス協会2020年度）、弓道12.6万、アーチェリー1.2万（スポーツスポート辞典 2022・06・27）だ。弓道

もアーチェリーも競技人口は極端に少ないが、アーチェリーは、弓道に比べても十分の一以下だ。競技人口が少ないということは、アーチェリーのできる施設も少ないことになる。また、通信販売を含めて、アーチェリーの用具を販売する店舗も、極端に少ない状況だ。アマゾンでも販売されているが、内容に乏しく、まともな道具を揃えることは難しい。このようにマイナーなスポーツではあるが、自分がお世話になっているアーチェリー協会は、初心者教育などを積極的に開催し、また丁寧な指導を行い、将来の競技人口を増やそうと努力されている。強い敬意を表したい。

② アーチェリーは、どちらかというと、静的なスポーツだが、意外と基礎体力がいる。他のスポーツと同様、上達するには、アスリートとしての能力は必須のようだ。また、射った矢を取りに行くときに、歩いたり走ったりするので、適度な運動量になるという特徴がある。

③ ベアボウはさほどでないが、弓矢とその付帯用具や防具に多くの種類があり、これらの知識と扱い方を習得するのは難しい。とくに初心者にとっては、これらを

理解するだけでも相当な期間を要する。

④ アーチェリーは、扱い方を間違えば人を殺傷する道具にもなる。用具の知識や扱い方を含めて、アーチェリーの入門には、適切な指導者がいることが必須となる。

⑤ アーチェリーは上達への道は厳しい。初心者教室でアーチェリーを学び、上達して上級者として活躍できるのは限られるだろう。その意味では、初心者教室に入った後に、中級者、上級者としてアーチェリー競技者として残る人の歩留まり率は、あまり高くなさそうだ。

弓道は、弓で的を射るという点で同類のスポーツであるが、こちらはどちらかというと礼節を重んじる印象だ。弓道の経験者から聞いた話だが、3年間くらい練習していても、まともに標的(近的で28m)に当たらない人も多くいるそうだ。それに比べれば、アーチェリーは、初心者でも10mくらいの近距離は、すぐに当たるようになる。競技自体の優劣をつけるわけではないが、当てること自体が一つの楽しみだと思えば、アーチェリーの方が取り組みやすい。一般的なターゲット

ットアーチェリーの競技の距離は、最低でも30mであるが、永久初心者レベルの自分としては、もっと短い距離で競い合うしくみがあってもいいと思う。

自分としては、アーチェリーの競技に参加して、それなり成績をあげようという大それた考えは全くない。また、体力的、技術的、年齢、さらに気力から考えても実現不可能だ。このスポーツをいつまで続けられるかわからないが、一つの趣味として、適度な運動になればいいと思っている。標的に矢を当てる快感はくせになるものがあり、単純に楽しめる。どのスポーツでも、楽しむことが一番大切だと思う。

ジンクス

学生時代の先輩で、「ジンクス」というバンドがあった。キングストントリオなどの軽快なフオークを得意としていた。演奏に加えて、彼らのステージは、楽しい要

素を持っていた。それは、曲間のトークが笑いを誘うものばかりで、話の最後は必ず巧妙な「オチ」があり、見事に決まっていた。勿論、演奏技術もしっかりとしていたバンドなので、いつも人気があった。

「ジンクス」という言葉は、縁起の悪い言い伝えで使われることが多いようであるが、彼らが、なぜこのようなバンド名にしたのかについては、今では知る由がない。ただ、「ジンクス」は、良い意味で使われることもあるようだ。別な言い方で「縁起担ぎ」があるが、この場合は、呪術的な使われ方になり、ニュアンスが少し違うようだ。他に、「ゲン担ぎ」という言葉もあるが、これはどちらかというとポジティブな期待を込めて、何らかの行動を伴うものだ。モチベーションの向上にもつながる。「ゲン担ぎ」を行う例は、試験前、旅行前、病気やケガ、天気、商売繁盛など、限りなく多い。「ジンクス」は英語が語源なこともあって、縁起の悪さを意味していても、何か明るさを感じてしまう。バンド名の「ジンクス」も、いい演奏ができるのではないかというようなポジティブな感覚で命名したのかもしれない。

話の方向を変えるが、自分にとって最大の「シンクス」は、トイレで何か起きると、引越越しすることだった。

最初は、子供が生まればかりの頃、トイレでペーパーを使い過ぎて、詰まらせてしまったときだ。一旦詰まらせた状態で水を流したので、水はトイレから溢れ周りが水浸しになってしまった。そのとき、公団の集合住宅の10階に住んでいたが、水は下の階まで漏れてしまったのではないかと心配していた。悪いことに、下の階の住人は、その頃船橋で有名なストリップ劇場の関係者らしく、彼女らしき人と一緒に住んでいることが薄々わかっていて。さほど時間を置かずに、下の階の住人から、「今、上から水を流したでしょう」とクレームがあつた。あわてていたせいか、どのように対応したかは、今では全く覚えていない。

子供達も小さかったので、下の階ではうるさいのではないかと、以前から気には掛かっていた。そんなこともあって、早めに移転した方がいいと思い、早々に引越越しの段取りを付けしまった。もう少しで引越越しという

ときに、異変が起こった。下の階の住人が、いなくなってしまったのだ。上の階の子供の足音はうるさいし、水も流されるので、嫌になって引越越してしまったのではないかと、申し訳なく思った。それでも、こちらの引越越しも、当然のことながら、止めるというわけにはいかなかった。意味は違うが「梯子を外された」状態であつた。

そのときを含めて、現在まで、3回ほど引越越しを行っている。引越越し先は、すべて集合住宅であつたが、すべて1階であつた。集合住宅でも1階は出入りに便利だという大きなアドバンテージはあるのだが、意図的に1階にしているのは、明らかにそのときの出来事の「トラウマ」によるものであつたのは、いうまでもない。

2度目は、ウォシュレットタイプのトイレに新調したときだった。交換してから間もなく、住居の広さや住居場所などについて新居を探していて、めばしいものが見つかったので、移転することにした。新しくしたトイレはもったいないことをした。

3度目は、故障による交換だった。トイレのタンクの中にロータンクボールタップという部品があるが、これがうまく動作しなくなった。これでやむなく、トイレ自体を新品に交換したのだが、この後すぐに、家庭の事情で引っ越さなければならぬ状況になってしまった。この引っ越しも、トイレの交換とは何の因果関係もなかったのだが、引っ越し自体は無事終了した。やはり交換したばかりのトイレには未練がいっぱいであった。

そして、最近になって、ついに4回目ときがきた。今度は、水漏れの不具合であった。引っ越しはいやだという思いがあったので、先延ばしにしていたが、水漏れには勝てず、またまたトイレ交換を断行した。今のところ引っ越しの兆候はないが、「ジンクス」撲滅で、神社周りでもしたいくらいの心境ではある。

「ジンクス」が、トイレの話になって申し訳ないが、引っ越し2回目以降の3回のトイレ交換で、図らずも、トイレの進歩の歴史を学んでしまった。最初の交換ではウォシュレットタイプ、その次は、自動洗浄、今回は自

動開閉という順であった。

最後に、バンドの「ジンクス」の笑い話にちなんで、トイレ川柳を三句。

使用中 コンビニトイレ 用足りず
なにくそと 踏ん張るほどに でるウンチ
コンコンは 早くで出てよの ラブサイン



紅葉（高尾山薬王院）

いんば華子



今年の夏は暑い。例にもれずこの夏もしぶとい残暑が続いていた。優弥が店に来た日だって秋らしさを感じてもよい頃なのに、結局背負っていた荷物のせいもあって、家に着いた頃には滝汗で床に染みが付いた。夜に二人分もシャワーの音はさせられないので、伊藤は離れの方に乱雑に置き去り、自分だけは汗を流した。そのままにしておくのも自分の清潔に対する価値観には反するが、本人も起きないので放っておくことにした。

さすがに夏の猛暑も力の衰えはじめた9月の終わり、店で仕事をしていると常連の一人がカウンターに座った。名前がわかるほどの仲じゃないが、週に1回は来るので顔は覚えていた。よく親父と世間話を交わして、食後にお冷をお代わりしていく客だ。土建関係なのか、薬品や土で汚れ、日に焼けて色の薄くなった作業服を着ている。胸のポケットには社名の〇〇建設だかの刺繍があったんだろうが、そちらも焼けてしまっただけの薄緑色と同化している。

「今日、大將は？」

中華屋の店主を大将と呼ぶのが正しいかわからないが、地元民でない常連は、親父のことを大抵そう呼ぶ。

「今、奥にいるんで」

「大将いるかい！」

厨房に呼びかけると、前掛けを整えながら出てきた。まだ調理服は厨房で着れたものじゃない。熱い油が跳ねるとたまらないが、そこはベテラン。薄手の長袖シャツで、なんとか暑さと油のリスクがちょうどいい塩梅の服を着ている。俺はそこまで頻繁に油調理にはかわらないので、半袖とジヨガーパンツの軽装で、厨房と客席とを忙しく行き来している。

「おお、どうした」

「参ったよ。ちよつといろいろあつてさ……聞いてない？」

常連の男は、声を潜めながらも、話したくてうずうずとしていた。

「何だよ。現場、なんかあった？」

男はカウンターに少し身を乗り出しながら言った。

「今やつてる現場から、死体が出てきちゃつてさ。もうびっ

くりだよ。長くこの辺りの工事請け負っているけど、こればかりは」

「今つてどのあたりやつてるの？」

「お宅の田んぼもあるほうじゃない。今そのあたりの用水路修繕工事やつてんだけど」

「沼沿いの方か？」

「そう」

男は、逸る^{はや}気持ちと一緒に声が大きくなることに気が付いていない。

「台風の対策するからって、工事と一緒にあたりの草刈りもやつてただけど、もう、作業してたやつがぎゃあぎゃあ叫ぶもんだから、刈払い機で足でも怪我したか肝が冷えて大変……つて。このこと知らないのか？」

「いや、区長からも周りからも全然聞いてないな……身元とか……」

親父が聞こうとしたところで、客席に流しているテレビのアナウンサーが、ニュースを読み上げた。

「……市内の工事現場で、身元不明の一部が白骨化した男性の遺体が発見されました。年齢は20代から30代とみられ、地元警察は身元の特定を急いでいます。警察は遺体の状態から、事故と事件の両方の可能性があるとして、捜査を進めています……」

「これ家の近くじゃないか？」

「現場って、あの田んぼの中にある神社近くの工事している場所だろ」

店内に数組いた地元客たちも、テレビのニュースを逃さなかったらしく、ザワザワとどよめいた。

「あー、まさか全国区ニュースになるとはなあ……これじゃ本当にしばらく仕事は無理だ。じゃ、また今度。落ち着いたら食べにくる」

常連の男は、支払いを済ませると行ってしまった。現場の職員だとしたら、店の中で質問攻めだろう。地元のことコメ作りをしている田んぼのこととなると、店内にいる客たちは容赦ないだろう。

「翼、縁起でもないこと言いたくはないけど、あの、同級生じゃ、ないよな？ 行方不明になってるっていう」

「……何言ってるんだよ、親父。」

あいつはもう2カ月近く一緒に住んでんだよ。

「想像したくねえけど、万が一ってこともあるからなあ。事故っていうなら、夜暗くて足滑らして頭打ったとか。もし事件ってならどうすんだこれ……」

慣れていない人が田んぼ道を運転すると、時々無様な格好で田んぼや用水路に車の前半分を突っ込んでいる状態になることがある。街灯の少ない農道の夜道なら尚更だ。しかし徒歩というのなら、大体は這い上がってくることができる。人が用水路で死んでいるなんてことは、昔話でも聞いたことがない。

全国区ニュースになったのをきっかけに、次の日から店に来る人は必ず1度は話題にした。テーブルで食べている家族やガテン系業者の会話の中、一人で食べに来た客は、俺か親父を呼び止めて地元住民しか知らない情報はないのか聞いて

てくる。昼時のニュースが流れ始めると、いつもはのんびりした店内に、一瞬糸が張り巡らされているような違和感がある。

テレビでも近所の噂でも進展がないまま、遺体発見の話は一時落ち着いた。新情報のような刺激がなければ、どよめきは起こらない。伊藤に店で聞いた話をする、部屋のラップトップからニュースを見たと言っていた。もちろん個人のスマホはないので、俺の部屋にあるものからだ。なんの驚きもなく、ふうんと言った。

あのニュースを聞いて、親父以外にも伊藤だと考えた人はいるだろう。遺体の年齢も失踪時期も当てはまっている。警察はきつと行方不明届からも調べるだろうし、伊藤の家族に連絡も来ているだろう。

「このままでいいのか？」

「何が？」

「そのニュース、絶対お前の家族聞いて、心配しているんじゃないか。その、いろいろ、同じだから」

「……俺だったかもしれないよな」

「そういうこと言うのやめろよ」

思わず言い返してしまった。状況に流されたのもあるが、家族の心配を考えると言い返さずにはいられなかった。しばらく一緒にいて情が湧いたのかもしれない。大学の授業で、よく接するものに好意を持つとか聞いたような気がする。同時に警察の捜査がより進んで、自分の部屋にいる伊藤を発見されてしまった場合の怖さもあった。そんなことになったら、自分も調べられるだろうし、行方不明であることを知っていながら、警察にも言わなかった理由を聞かれるだろう。はじめはちょっとした状況に魔がさしたくらいの気持ちだった。事の詳細がはつきりする前に、伊藤にはせめてこの部屋から出て行ってもらいたい。

「悪い。大きな声出して。行方不明届出されているのは、ここにきてすぐの時に言っただろう？ 早く安心させてやったほうがいいんじゃないか？」

自分は冷静だ。

「はつきり言えばいいだろ。邪魔になったんだろ？ もともと飯食わせたりする義理もないしな。死体の捜査ついでに、警察に見つかつたら困るからだろ」

「それが飯食わせてやった俺への態度かよ」

「勝手にやったことだろ。俺は、食わせてくれなんて言っていない。助けてくれなんて言っていない」

「おまえなあ！」

「俺がいてもいなくても、何も変わらない。生きていても死んでも変わらない。もう十分わかつてんだよ。なんの役にも立たない。無職で、金稼ぐこともできない。能力もない。いらないだろ、こんなやつ」

「……それでも、家族の心配な気持ちをなくせるのは、お前だけだろ。帰ってやれよ」

「家に帰ったところで荷物になるだけだろ。せいせいしてるんじゃないか」

「かえ……」

力強く握った拳を振り上げたところで、振り下げるのをや

めた。人なんか殴ったことはない。兄弟もないから、殴り合うような喧嘩をしたこともない。そして振り上げたこぶしは、伊藤をただこの部屋から出したためのものだ。

「今日はもう寝よう」

怒りを抑え込み、俺は押し入れから布団を二組出した。沸き上がったものはなかなか収まらない。ぞんざいに布団を出し、八畳ほどある部屋の隅まで伊藤が使っているもみ殻の枕を飛ばした。

ゲームをしながら就寝することもあったので、いつも布団の間は一メートルも開いてなかった。そんなことをしながら、こんな近距離で俺は二カ月もこいつと寝食を共にしたのだ。少しでも遠くにいたい気持ちがわかったのだろう。伊藤は何も言わず、枕の方に距離を合わせて布団を敷いた。

そのままいなくなってくれることを期待したが、伊藤は数日たつても部屋を出ていなかった。時間になれば飯をもらいに店まで来たし、言われずとも犬の散歩と餌やりをこなし

ていた。次の手段も思いつかないままで、ダラダラと同棲が続いてしまうカップルの片鱗を味わっているかのようだった。

それだけならまだしも、あのお通夜以来顔を合わせていなかった紅美が何の予告もなしに店に來たのだ。今までも時々食べに來ていたが、あれ以降顔を合わせにくいと感じていないわけではない。メールでもラインでも氣を使ってくれてもいいのに、唐突に親父さんとやってきたのだ。

渋々小上がりに案内し、メニュー表を渡す。

「注文は？」

睨んでもやりたいし、どうして一言ないんだ、よくあのままで來れるなど目から言葉がだせるならそうしたい。紅美と親父さんは、二人しかいないのに昼ごはん作るのが面倒だからの流れでやってきたと理由が透けてみえる。その調子のまま、中華丼二つと一緒に餃子一皿を追加する。

「今日一人で回してるの？」

紅美はこの前のことはなかったかのように話す。

「親父も一緒」

二人のいる場所から厨房の奥までは見えない。中華鍋に入れた食材が油に反発してはじける音が、親父の居所を伝える。

「翼君は作んないの？」

紅美の親父さんが中華鍋を回すような動作をしながら聞く。

「親父が譲らないんで」

確かに、一人の日や注文が多いときは隣で下ごしらえや別の鍋を使って作ることはあるが、基本は親父だ。やるなども言われないが二人で店に到着して帰るまで、分業制が続く。

パートがない日は俺のポジションに入り、俺は厨房と客席とを交互に移動するようになる。これがバイトとかいるとシフトを組んだりマニュアルを作ったり……かつて数年間でも店の運営も行っていた。けれども経営はよくなくて、一時期いたバイトもいなくなり、結局は自分ひとりで店を回すことが多かった。そのあたりはあまり今と変わらないのかもしれない。一緒に事業を立ち上げた大学の先輩は、店に立つとい

うよりは経営をメインに資金回収に奔走する羽目になっていた。店を持つことの難しさをダイレクトに感じていたし、終わりの方はプレッシャーやそれこそ目の前の物も事も片付けることに追われて、実家に帰るのが精いっぱいだった。今でも思い出すと頭が締め付けられるようだ。注文をとるために持っているペンが震えていないことを確認し、今はもう違うんだと改めて言い聞かせる。負った借金は今も自分の生活、つまりは親父の店や岩井家家計を圧迫しているのは間違いないが、事業を畳んだ時の思いは二度としたくない。

「注文承りました。はい、いらっしゃい」

伝票をカウンター前の親父に渡しながら、新規の客を案内し、お冷とおしぼりを渡す。昼時だから、もう少しくらいは込み合うだろう。

案の定、レジ操作するのも自分だ。食事が終わり伝票を持った紅美がやってくる。親父さんはちよつと言いながら奥のトイレに向かった。

「ごちそうさまです」

「あ、ああ」

「この前、お通夜の時はありがとね。車のお礼言ってなかったから」

「いいよ。別に」

お釣りを数えるがなかなか進まない。

「あと、言いすぎたと思ってる」

紅美も店には来づらかったようだ。ここに来るということは、こうやって俺を目の前にして話すことになるのは目に見えているのだから。親父さんの食べに行くかに対しても複雑な気持ちだっただろう。

「いや、それだいぶ俺の方……」

言い過ぎたのは俺の方だったはずだ。過去の記憶を塗り替えるような偽善に聞こえたからだ。伊藤は俺や優弥のような中学生らしい思い出や居心地を得ることはなかった。それは変えられないから、あの夜店の中ではなく、裏のごみ箱の隣に転がっていたんだろう。俺がそれを引き入れたのは、あの時の無関心の罪滅ぼしでもなく、偽善でもなく、救いたいと

いう気持ちでもなく、助けなければいけないという同じ人間だからという義務感のようなものに近いのかもしれない。そこに転がっているのは、カフェ事業に失敗した直後の自分だったかもしれないという恐怖と一緒に、拾ったのだ。きっとそう感じたのは、優弥のように出来事から時間を置いたからなのだろう。

「俺も、あの後考えてさ……うまく言葉にできないんだけど……」

「いいよ。ダイジョブ」

紅美はお釣りを受け取りながら、俺の肩をポンと叩いた。大人の仲直りがこれでいいのかはわからないが、ふと伊藤の人生にはこういうことが訪れないのだろうという考えが降りてきた。誰のせいとも言いきれない、奪われた時間がある。それだけは確かなのだ。

「そういうえば、白骨死体の話最近聞かなくなっちゃったけど……伊藤君じゃなかったみたい。うち親戚だからさ、ちょっと話だけ聞いちゃって」

「そうか。よかった……でいいのかわからないけど。こんな近所でそんなわけないだろ。ご両親はまだ心配してるよな」

「お父さんが聞いた話だと、安心したけど、見つかるかは気長に待つしかないって、警察とかからは言われているみたい」

「まさか、犯人だったりしてな」

「やめてよ。お父さん」

いつの間にか、トイレから親父さんが戻って会話に加わる。

「よく言うじゃないの。あんなに大人しかった子がなんてな」

「やめてよ」

紅美の強めの平手が親父さんの背中をしならせた。

「ちよっとしたブラックジョークだよ。そんなこと本当に地元であつてたまるか」

親父さんのジョークは言い過ぎなところもあるが、伊藤がまさかという考えが一瞬過ってしまった。殺人犯をかくまっていることになったらそれこそ冗談では済まない。とにかく今は伊藤を早く実家に帰らさなければいけない。どこで過ごしていたか聞かれたら、神社や寺を転々としていたと言わせ

る。俺ができることはもう十分やっただろう。自宅と店の往復、借金の返済で単調だった日々が少しでも早く戻って欲しい。こんな緊張を抱えるのは、望んでいない。

偶然やってきた昔の同級生が哀れに見えて助けた。本当にそれだけのだから。

今日は少しでも早く戻りたかったが、遅い昼をとりに来た客と早い夕食をとりに来た家族やらで、ろくな昼休憩も早上がりもできない状況になってしまった。

結局いつも通りの流れで店を閉めた後二人で片付けと明日の仕込みを行っている。

店前を通る県道を、遅めの帰宅をする車が行き来している。九時半にもなれば、朝夕のラッシュ時よりだいぶ減ってくる。その分店内にもタイヤとアスファルトが擦れる音が響く。途切れたときには、俺が洗っているグラスの音、親父が壁のフックにお玉や鍋蓋をかける金属音が厨房の壁を走る。そろそろ買い足しが必要な食材や排水の掃除で手伝いが欲しいとか、必要最低限の時しか口は開かない。家族経営の厨房は、

はこんなもんだろう。

「翼、今いくつだ」

おもむろに話しかけてくる。

「三十二」

親だったら子どもの年齢くらいと思ったが、自分も二十代後半からあやふやになることが増えたことを思い出した。ふと親父の年齢も気になり、聞き返した。頭はもうだいぶ前から寂しくなっているが、年齢はそこまででもなかったはずだ。

「親父いくつだっけ？ 六十くらい」

親父は軽くうなずいた。

「手伝い辞めないか？」

この言葉には、グラスを洗う手が止まった。今日は厄日なのか？

「え、ちょっとそれは、俺がよくない。マジか……今もだいぶギリギリで返してて……」

親父はもう俺を置いておきたくないのだ。こんなブーメラ現象あっていいのか？ 今この家の仕事をなくすわけにはいかない。驚きで跳ね上がった心臓がそのまま強張った。

「代替わりだよ。出ていけって言ってるわけじゃない」

喉までせり上がっていた心臓が元の位置で鼓動を始める。安心したのも束の間、お袋がない所で言うことは……

「……どこが悪いのか？」

「肝臓がちよつとな」

「そんなに悪いのか？」

「もう10年も前から薬飲んで、ビールもろくに飲めないし。なんて顔しているんだ。この歳になれば、誰だって薬の一つや二つ……。この夏もやつとだ。ならそろそろ代替わりだよ。もう身体も無理がきかなくなってきた。店主は交代だ」
返事ができなくて、とりあえずグラスを洗い続ける。

「店も借金もある、そんなに儲かる場所でもない。でも、うちがいいって食べに来る人はいる。それでいいなら……、別にカフェがやりたいなら、店主になれば改装だってできる」
「親父……もうカフェはいいよ」

呆れ半分で返す。同時に、親父が辞めるという寂しさがこみ上げる。もちろん登記上の店主が交代するだけで、中華屋は家業なのだからこれからお袋含めて三人で店を回すことは変わらない。けれどもこれからは、自分で決めていくと

いうことだ。

「俺は別にこの中華屋が嫌だったわけじゃない。別の場所でも一から何かをやりたいかったんだ。そのくらい、初めの目標は曖昧だったし、やろうと思ったときには若くてやる気だけはあったから。だからって、四川をやっていくことが簡単だとかじゃなくて……その」

全然そんなこと聞く準備なんてできていなかった。けれど今しか言えないことがある。

「大学行かせてくれて、ありがとうございました。俺は、いろんなもの見て、勉強もしてやりたいことやってみたけど、失敗して借金作って帰ってきました。でも、後悔しないくらいには、しっかりやってきました」

泡だらけの手を握ったまま、勢いで頭を下げていた。
「なんだ。改まって。そういうのは……死にそうになった時で十分だ。それに、料理の段取りはまだまだだしな」

その後はお互い気恥ずかしくなって、急いで作業の続きをした。親父に限っては、そのまま俺は先に帰ると言って、前掛けを外しながら出て行ってしまった。

嬉しいような感慨深いような気持ちではなれに戻ると、当

たり前のように伊藤が飯は？ と聞いてきた。適当にタッパ―に入れてきた中身を渡しながら、この現実を変えるために今日一日思案していたことを思い出した。きちんと出ていくように言って、実家に帰ってもらう。結局このやり取りの最後は、そうなるのだ。店も自分も借り入れたお金を返している途中だ。生活が厳しいことは前提だから、できる営業はしていきたい。そこは、かつて事業を始めようとしていたプライドがある。伊藤にかまっている場合ではない。

口を開こうとしたとき、床にいくつか郵便物があることに気が付いた。

「それ……」

「ドアに挟んであったから取つといた。お袋さんがポストの中身出してくれてたみたい。それ全部翼宛だから」

床に広げられていたのは五通ほどだったが、ダイレクトメールの中に手書きで宛名が書かれている薄緑の封筒があった。消印は都内。結婚式の招待状だとしても、まずはラインかメールが来る。住所しか俺の連絡先を知らない相手。久しぶりに見る差出人の名前は、一緒にカフェをやっていた、大学の先輩からだった。本当に今日は頭が追いつかない。廃業

の処理以来会っていない、連絡さえ取らなくなった相手。喧嘩別れをしたわけではないが、話をするのも名前を見るのも苦痛に感じてすべてを切ったはずだった。今だって、後頭部を血液が這い上がり、顔の方から一気に血の気が引いてくる感じがする。

「今日忙しかったのか？ お前あんまり顔色よくない」

何も知る由もない伊藤が、タッパ―を開けて店の匂いをさせた。

「翼？ なあ、待つて待つて」

伊藤が慌てているのが辛うじてわかる。タッパ―の中身をひっくり返さないよう素早く折りたたみテーブルにおいて、畳の滑りを利用してスライディングしているのが僅かに見えた。

まるでクレーンを使った映画のワンシーンみたいに、俺の視界が一回転していた。

蛍光灯の明るさの隙間から、ミミズが走っているような天井の模様がわかる。仰向けになった背中の下には、妙な厚みを感じる。思いの外頭の中は冷静で、ああ、目が回ったのかと納得していた。

〈以下、次号〉



ポンペ・メーデルフォールト(宮永 孝著“ポンペ”より転載)

若きオランダ医 ポンペ

香取 淳

プロローグ

その特別講演は同窓会総会の案内には載っていないかった。三年前にノーベル化学賞を受賞した下村脩博士しもむらおさむによる「飛び入り」の講演である。偶々来日されていた博士に同窓会への出席を依頼したところ、快諾されたいうえ、講演までしてくれることになったのだという。司会者は、「下村先生は皆さんよくご存知の事と申しますので、改めてご経歴の紹介は致しません。早速、先生にご登壇を願います」と述べて、マイクを博士に差し向けた。

総会の会場は長崎市内の南山手町、グラバー園や大浦天主堂がある小高い丘を背にしたホテルの大広間である。フロアの隅から立ち上がった博士は、軽やかな

足取りで演壇に向かう。瘦身で背が高い博士は、八十歳を少し過ぎているが、凛とした容姿や身のこなしからは高齢を感じさせない。会場に集まった同窓生たちは、ハプニングともいえる博士の講演に驚きと喜びを抱きながら、同窓会ならではの話に期待を募らせた。

——私は、旧制の諫早中学を卒業しましたが、学徒動員で勉強する機会は殆どなく、上の学校に進みたいと思っても、どこも受け入れてくれません。途方に暮れたまま二年ほど経ったとき、家の近くに被爆した長崎医科大学附属薬学専門部の仮校舎が移って来たのです。当時は「長崎薬専」と呼ばれた長^{ちやうだい}大薬学部の前身です。私はそこに運よく入学出来ましたが、仮校舎には実験設備もなければ教育スタッフも手薄で、お粗末な授業しか受けられなかったことをよく覚えています……。

そう話しながらも、博士は長崎薬専に入学できたことが「科学者への道」に繋がる原点であったことを強調。父が軍人であった関係で全国を転々として育ったが、太平洋戦争の勃発により、母の実家がある諫早に疎開してきたのだと言う。

——薬専を卒業した私は、武田薬品の採用試験を受けたのですが、落ちてしまいました。仕方がなく、母校の安永峻^{やすながしんじ}五教授のもとでしばらく実験助手をしました。四年ほど経ったとき、安永先生は私を分子生物学で名高い名古屋大の江上先生のところ内地留学させて下さるということで、私は先生について名古屋へ行きました。ところが、江上先生は出張中で不在でした。仕方がなく、安永先生と同郷の平田先生(有機化学専攻)に挨拶に立ち寄ったところ、平田先生が「僕のところにはいらっしやい」と声を掛けて下さった。私が平田研究室に入りたいと誤解されたのか、それとも江

上先生に会えないのであれば、僕のところ、と救いの手を差し伸べてくれたのかは解りません。専門領域は違っても、勉強の機会を与えて下さる先生であれば是非お願いしたいと考え、私は平田先生の研究室に行くことにしたので……。

この話を聞いたとき、筆者は「下村先生は出来が悪かったんだなあ、我々は武田でもどこでも好きな会社に入れたのに」と少し優越感を覚えた。もちろん、我が国が高度成長期に差し掛かり、誰もが好きな会社を選べた筆者の学生時代とは世情や経済状況が違ふことは十分承知のうえで。

——名古屋大学で平田先生から与えられた仕事は、海ホタルの発光の基であるルシフェリンの精製と結晶化でした。米国のプリンストン大学の研究者が二〇年以上も前から努力を重ねても成功していない仕事で、大学院の学生には任せられないということです。私は

ほとんど毎日徹夜で仕事をしましたが、実験に取り掛かって一〇ヶ月が過ぎたとき、ひよんなことからルシフェリンの結晶化に成功しました。この成功により、私は一九六〇年にプリンストン大学のジョンソン博士の招きで渡米します。米国では、オワンクラゲの発光物質の研究に携わりましたが、その研究過程で発光タンパク質のイクオリンを発見、ほぼ同時期に緑色の光を放つ GFP を発見しました。

その GFP は、発見された時点では何の役にも立たない物質でしたが、その後の遺伝子工学の発展により状況は激変します。生物の細胞内に GFP を組み入れることに成功し、紫外線を当てると光を放つ大腸菌や線虫などがつくられました。そして、現在では癌細胞の増殖や転移の様子、アルツハイマー病で脳細胞が死んで行く過程などが観察できるようになり、医学にとって不可欠の物質となったのです。ですから、私がノ

ノーベル賞を受賞するとすれば、医学賞になると思っていたので、化学賞はちよつと意外でしたね……。

下村博士は専門分野の話には深く踏み込まず、自身の生い立ちや受賞に至った経緯を飾らずに披露して、スピーチを次のように結んだ。

「私は非常に運が良かったと思います。これまで歩んできた道を振り返ると、ノーベル賞が私を手招きしてくれたような気さえしています」

落ち窪んだ眼を瞬^{しばた}かせながら短い講演を終えた博士は、演壇を降りてフロアの主賓テーブルに戻った。彼のテーブルには古参のOBや学部長たちが陣取り、乾杯の後には和やかに談笑をしている。筆者は、後方のテーブルにいたが、妙に納得した気分でグラスビールを嘗めていた。いまの講演で、下村博士はノーベル賞の受賞を鼻にかけることもなく、ひたすら運がよかったことを繰り返した。同窓生に対する謙遜もあつたであ

ろうが、博士自身がそのように思っている節がよく伝わってきたのである。

筆者は、大企業における社長や取締役等のポストを巡る争い、或いは大学病院の教授選などにおいて、運の良し悪しが結果に係わってくる事例を数多く見聞きしてきた。そこでは、本人の実力や実績もさながら、それ以上に運の良し悪しが結果を左右する。その

「運」は、当事者にとってはどうにもならないことであり、人は太古の昔から神仏にすがって、ひたすら祈るほかはなかった。少なくとも、運を引き寄せる方法を知る人はいなかったし、知ろうと画策した人もいなかったように思われる。

ところが、米国の大リーグで活躍している大谷翔平選手の場合は、高校の野球部に入ったときに作つた曼茶羅^{だら}チャートで、第一の目標達成(ドライチ8球団)に必要なことの一つに「運」を掲げている。さらに、そ

の運を引き寄せるために挨拶やゴミ拾い、プラス思考などを明記しているが、彼は第一の目標達成どころか、世界中の誰もが驚くほどの成功を収めている。そこで、彼が歩んできた道程を検証してみると、本人の努力は言うまでもないが、良い指導者や監督、球団に恵まれ「運がよかった」ことは疑う余地もない。ということは、必ずしも運は神仏に委ねるものとは限らず、本人の心掛けや行為行動などで引き寄せられるもの、或いは何らかの人為的な事柄と関係性があるものということが言えるかも知れない。

そうであるなら、下村脩博士が自身でも指摘する

“無類の運の良さ”は何に由来するのであろうか？

博士は受賞した直後の記者会見で、「日本のノーベル賞受賞者は、これまでほとんど旧帝国大学の出身者で占められていたが、私は教育設備も満足に整っていない地方大学の出身である。このことから、一流大学を出

なければノーベル賞を取れないと思い込んでいる若い人たちに、決してそうではないということを知って欲しい」とも述べている。

地方大学の、それも日本の西端にある大学の出身者から何故、最初の受賞者が出たのか……と考えたとき、それは長崎の歴史が関係しているのではないか、西洋の近代科学の知識にとどまらず、医学や物理化学の教育が初めて行われたこの地の歴史が後押しをしたのでは……と筆者は考えた。

そのような関係性が成り立つか否かはひとまず措くとして、いま同窓会の総会が開かれているホテルは江戸時代にオランダ人が居留した出島の跡から幾らも離れていないし、幕末の開国時には欧米人の居住地でもあった。そして、日本に近代医学と化学や物理の知識が伝えられたのもここ長崎。このゆかりの地で学んだ多くの武士や医師・学者たちが江戸や全国各地に近代

科学の知識を広め、さらに深く探求していったことは疑う余地もない事実である。

それでは、誰が近代科学の知識を、ノーベル賞にもつながるような物理化学、医学等の知識を日本にもたらし、教えてくれたのであろうか？

この問い掛けに対して、多くの人はシーボルトの名を挙げるに違いない。確かにシーボルトは西洋の医学・薬学の知識や簡単な手術などを日本に伝授し、多くの弟子を育てた。しかし、それらは断片的な知識や手技の伝達に過ぎず、ノーベル賞に繋がるような基礎的かつ系統的な知識でもなければ教育でもなかった。

むしろシーボルトは、オランダ軍の機密調査官として、伊能忠敬の日本地図や林蔵が発見した間宮海峡、さらに日本の政治経済、宗教や文化、生活習慣などを調べ上げ、書籍化して世界中に発信した人物といえる。鎖国下の日本では入手できない機密情報を得るた

めに、最も有効な手段として西洋医学の知識や手技をうまく利用したという側面が大きい。

鎖国下の日本に近代科学の知識や技術を伝えてくれた人物はシーボルトの他にもビュルガーやモーニッケ等を挙げることができる。しかし、近代科学の総合的な知識を体系的に伝え、しつかり我が国に根付かせてくれたのはオランダの若き軍医ポンペ・メーデルフオールト。弱冠二十八歳で来日し、五年もの歳月をかけて献身的に教えてくれた若き外科医ポンペと、彼の近代科学教育を引き継いだオランダの優れた教師陣であった。

その大恩人ともいえるポンペの名は、残念ながら多くの日本人に殆ど知られてはいない。彼の名をよく知っているのは僅かに長崎大学医学部の学生とOB、付属病院の関係者のみに限られるであろう。何故なら、ポンペは長大医学部の創始者であり、医学部のキャン

パスにはポンペ会館が建てられている。そして、そこには彼のレリーフが掲示され、彼が残した金言「医師は自らの天職をよく承知していなければならぬ。ひとたびこの職務を選んだ以上、もはや医師は自分自身のものではなく、病める人のものである。もしそれを好まぬなら、他の職業を選ぶがよい」が校是として残されているからである。しかし、この医学部と歴史的に關係が深い薬学部（薬学）の学生や筆者のごとき薬学部OBでさえもが、ポンペについては殆ど知らないのが実情である。

そこで筆者は、数年前に九〇歳でその生涯を閉じた下村博士、彼にとつては故郷ともいえる長崎の市中病院で逝去した博士のご冥福を祈りながら、ポンペのことをもう少し多くの人に知って欲しい、近代医学にとどまらず近代的な科学知識を日本に伝え、その青春を我が国の近代医学、科学教育に捧げてくれたオランダ

の若き外科医、ポンペ・メーデルフオールトの話を描きたいと思い立った。

一、ポンペが日本に

オランダの若い医師ポンペを乗せた軍艦ヤパン号は、三ヶ月を超える厳しい航海を終えて長崎湾口に錨を降ろした。時は一八五七（安政四）年九月二一日の夜九時過ぎで、辺りは深い闇に包まれている。通常であれば艦はその場に停泊し、夜明けを待って到着を港に知らせるところである。ところが艦長のカッテンディークは、大砲を二発放つことを甲板員に命じた。そこにはヤパン号の到着を日本人に知らせ、太平の眠りから目覚めさせようという狙いが込められていた。

夜の静寂しじまに轟音がいんいんと響き渡る。異国船の到着を知らない長崎の人々は突然の轟音に肝を冷やし、

大騒ぎになった。たちどころに丘陵のそこかしこに松明が灯され、その灯かりは丘陵一面を覆ってゆく。乗組員たちは全員が甲板に出て、無数の松明とその灯かりが海面に揺らめく光景に見とれた。

暫くすると、和船に乗った二人の武士が、大勢の供を連れてやってきた。通詞と共に艦に乗り込んだ武士たちは、艦長のカッテンディーケに根掘り葉掘り質問を投げ掛ける。質問の中には、妻の有無や子供の数などの外れの問もあったが、この船は幕府がオランダに発注した軍艦であり、艦長たちが日本に回送して来たことを知ると、すぐにヤパン号の入港を許した。しかし、カッテンディーケは、危険な夜間の入港を避けて、錨を揚げることはしなかった。

やがて東の空が白み始め、徐々に薄い青へと変わってゆく。ポンペたち乗組員はみな甲板に出て、食い入るような目で辺りの景色に見入っている。長い航海の

後では見るものすべてが美しく見えるというが、艦を取り巻く丘陵は“緑の国”という印象を彼らに与えた。それというのも長崎港は左右を山に挟まれ、水際から頂上までが緑一色に塗り潰されている。その麓に人家や寺院、砲台などが点在し、斜面には垣根に取り囲まれた畑が見える。甲板に立ったポンペたちは、誰もがその美しい光景に感嘆の声を上げた。

艦長のカッテンディーケは部下に缶焚きを命じ、火夫が手慣れた手つきでボイラーに石炭を放り込む。中央マストの前に設えた煙突から黒い煙がもうもうと立ち昇ってくる。大海の大西洋やインド洋では三本マストに帆を張って航行してきたので船尾のスクリューは邪魔になる。そのため、最新式のスクリューは海面上に引き上げられていた。その二枚羽のスクリューを海中に下げて回転軸に装着。蒸気船と化したヤパン

号は幾筋もの白波を後に曳いて狭い湾口に入って行く。

「鶴の港」とも呼ばれる長崎港には、オランダの旗をひるがえした船が四艘に、ロシアの船、日本の大小の船などがたくさん見受けられた。それらの船の間を縫って、ヤパン号は出島の船着き場に接岸した。

出島では、前任のライケン中佐と士官たちが威儀を正して一行を出迎えた。大尉のカッテンディーケは、ライケン大尉とは旧知の間柄で、二人は固い握手の後に抱き合い、互いに肩を叩き合った。次いでライケン中佐は、大尉のあとに続くポンペや新任の士官たちと握手を交わして、長旅の労苦を慰めた。

前任の「第一次長崎海軍伝習所」の教師団との挨拶が済むと、ライケン中佐は大尉やポンペたちを弁務官のドンケル・クルチウスの石造りの邸宅に連れて行った。広い客間に通されたカッテンディーケたちは、着

任挨拶の後に、持参した手紙やバタバアからの主なニュースを伝える。客間には前任教師団の幹部も多数同席しており、カッテンディーケやポンペたちは先遣隊の面々と大いに語り合った。

昼食を兼ねた団欒が終わりに差し掛かると、弁務官のクルチウスは着任した教師団を集めて訓辞を述べた。彼は、幕府と交わした約束、すなわち欧米列強国に屈しない海軍を日本に創設するという使命を一時たりとも忘れてはならない、その為にも前任の教師団との引継ぎをしっかりするようにと励ました。

新任のポンペたち一行は、弁務官の邸宅を後にすると、出島の中をつぶさに見学して歩いた。先遣の教師団が教育を施している建物や施設を検分し、日本の役人たちにも会って着任の挨拶を済ませる。さらに、出島における隊員の住まいも決められ、カッテンディーケはクルチウス宅の一室に住むことになった。医官で

あるポンペには広い植物園の中にある住宅が与えら

れ、そこからは真青な長崎湾を一望出来た。その家は十メートル四方の二階建てで、階上の二つの壁には大きなガラス窓が設えてある。見るからに快適そうな建物であったが、到着から何日が経過しても、ポンペはその家に入居することが出来ない。理由は、先遣隊の一員である医師ブルックが、住宅を明け渡そうとしなためであった。

仕方がなく、ポンペは港に停泊しているヤパン号の船室に留まったままブルックに業務の引き継ぎを求めた。しかし、ブルックはポンペの言うことにまったく耳を貸さず、住居の引き渡しを拒否する。しかも、公的な文書や手紙類もすべてを一人で抱え込み、ポンペに閲覧さえさせなかった。ポンペは、その窮状を司令官のカッテンディーケや弁務官に訴えたが、善処の兆しは見えなかった。

ブルック医官の拒否反応の話が出たところで、前任の隊員たちが日本に派遣された経緯やそのときの世界情勢について触れておこう。事の始まりは、黒船騒動にまで遡らなければならない。一八五三（嘉永六）年七月八日に、東インド艦隊のペリー提督は軍艦四艘を率いて浦賀沖に侵入した。『外国船は長崎に』という江戸幕府の規則を無視し、大砲等で威嚇しながら幕府要人との面会を求めたのである。初めて見る蒸気船と江戸城に向けられた大砲に恐れをなした幕府は、洪々ながらアメリカ大統領の開国を求める親書を受け取った。日本の幕府は、何事も即答できないことを知っていた。ペリーは、大統領の親書を江戸幕府に手渡すと、「一年後に返答を求めて再来する」と言い残して上海へと去って行った。

ところで、アメリカは何故、ロシアやイギリスに先んじて、日本に開国を迫ってきたのであろうか？ その答は、米国がメキシコとの戦争（一八四六～四八年）に勝利して、カリフォルニアを手に入れたことにある。西海岸に港を得た米国は、年々盛んになる清国との貿易を太平洋航路に変えようとしていた。その太平洋航路の中継基地として、日本を開国させる必要に迫られていたのである。さらに、欧州の列強国に後れを取ったアジアへの侵出を、この機会に挽回しようという狙いもあった。江戸幕府は「突然、黒船が……」と大騒ぎをしたが、ペリー提督を日本に派遣する計画は、米国がメキシコに勝利した時点から進められていたのである。

その準備の一環として、米国は日本と交流のあるオランダを利用した。出島の歴代商館長が著した本やシ

ーボルトからの情報を収集し、その見返りに日本への進出計画を細大漏らさずオランダに伝える。

一方、オランダ政府は、米国の侵略的な企みを把握すると、日本の幕府にいち早く報せた。その背景には、米国の動きを江戸幕府に気付かせて、米国より先に日本と和親条約や通商条約を締結したい。さらに、欧州の列強国に先駆けて幕府と条約を結び、国際的に優位な位置に立ちたいという国家戦略があった。さらに好意的な見方をすれば、英仏が清国に強要したような不平等条約を日本に持ち込む前に、国際法に基づく平等な条約を江戸幕府と結んで、後に続く国々の規範としたい思惑もあった。

オランダ政府は、その構想を具現するために優秀な外交官であるクルチウスを出島の商館長として日本に送り込んだ。一八五一（嘉永四）年のことで、前出のポインペたちを石造りの館で歓迎した弁務官のクルチウス

である。彼は、ペリーが来航する一年以上前に「別段風説書^{ふうせつがき}」を認めて長崎奉行に提出している。その中身は、アメリカが通商を求めて日本にペリー提督を派遣し、彼が指揮する軍艦四艘は翌年の四月頃にはマカオを發つて江戸へ向う……という詳細な予告であつた。

しかし、幕府はオランダからの情報を信用しないばかりか、ペリーの来航予告文書を極秘扱いにしてしまつた。担当部門の海防掛以外には、御三家にも浦賀奉行にも知らせなかつたのである。その無防備状態の江戸湾に、突然ペリー艦隊が来襲したのであるから、日本中が慌てふためくのは当然の成り行きである。江戸幕府は見たこともない「黒船」の脅威に晒され、ようやく「太平の世」の眠りから目を覚ます。さらに、前々から開国を求めていたイギリスやロシアも米国に倣つて軍艦を差し向けてくるのは時間の問題である。

その武力攻勢に為す術もない幕府は、前々から親交のあるオランダ政府に相談を持ち掛けた。

相談を受けたオランダ商館長(当時)のクルチウスは、風説書情報を無視した江戸幕府の愚鈍さを嘆いたが、それでも腹を立てずに解決策を示した。その策は「日本海軍の創設」であり、後に日本に派遣されるスンビン号の艦長フアビウス中佐からの提案であつた。クルチウスは、中佐の提案を意見書に取り纏めて、長崎奉行の水野忠徳^{ただのり}に提出。忠徳は意見書を「幕府海軍伝習所構想」として老中首座の阿部正弘に進言する。かくして、打開策を模索していた正弘は長崎から届いた構想に同意して、海軍伝習所を設立することが本決まりとなつた。

江戸幕府から支援を頼まれたクルチウスは、先ず、訓練用の戦艦が必要になると考えた。そこで、オランダ政府に折衝して、スンビン号を国王ウイレム三世か

ら將軍家定への贈り物として幕府に提供する。この戦艦は三本マストの木造船で、四〇〇トンの外輪式蒸気船。現代風に言うなら、帆船と蒸気船を兼ね備えた

“ハイブリッド船”といったところである。そのスンビン号が、一八五五(安政二年)の六月に、前出のファビウス中佐に率いられて、僚船のヘデー号と共に長崎港に到着した。

一方、江戸幕府は春に贈呈されたスンビン号の名を“観光丸”と改めて練習艦とし、その年の秋十月に第一次長崎海軍伝習所を立ち上げる。伝習所教師陣の团长はスンビン号の艦長ライケン大尉が務め、観光丸の操船や修理のやり方の訓練に必要な要員二〇人余りが長崎に留まった。その要員の一人に、前述の医師ブルックも含まれていたのである。

医師のブルックは、オランダからの派遣隊員が怪我をしたり病気に罹ったりしたときには診察と治療に当

たったが、医学や医療には関心がなかった。むしろ科学者として物理や機械、とりわけ蒸気機関の構造や性能などを訓練生に教えることを好んだ。その物理や機械の話を熱心に聴いたのは薩摩や佐賀藩などの武士たちで、幕臣である旗本の子弟は殆ど興味を示さない。

身分が保証されている幕臣の子弟は海軍伝習所に入っても本気で勉強をする気はなく、大半が“長崎遊学”という箔付けの為の参加であつた。ブルックは、そのような幕臣の子弟に教えることを毛嫌いし、もっぱら藩から派遣された生徒を相手に産業革命後の近代科学知識を授けた。

その様子を見聞きした弁務官のクルチウスは微妙な問題に悩まされた。幕府と約束を交わした海軍創設のために、幕臣たちを訓練する目的で伝習所を開いた。ところがブルック医師は大切な幕臣の子弟を遠ざけ、幕府とは縁遠い藩の武士たちに本業以外の知識を教え

ている。そのような事態が江戸に伝わると、幕府との信頼関係が損なわれるかも知れない。そこでクルチウスは、団長のライケン大尉を通してブルック医師に再三、注意を促した。ところがブルックは、産業革命後の著しい科学の進歩を日本人に伝えて早期に開国の必要性を悟らせる、そのために教師団は最新の科学を日本人に教育せよ……という訓示を盾にとり、己の正当性を主張する。一介の医師に過ぎないブルックには、江戸幕府とオランダとの微妙な関係など、端から理解できなかったのである。

そのような経緯があり、ブルックは上官から白い目で見られ、何度も注意を受けてきた。さらに、今回は伝習所の第二次教師団から除外され、代わりにポンペがオランダから派遣されてきた。己の処遇に納得がいかないブルックは、後任のポンペに強い反感を抱き、

自分の更迭を決めた団長のライケンや弁務官のクルチウスにも反抗的な態度を取ったのであった。

内部体制に若干問題を抱えたライケン大尉の教師団であったが、彼らから訓練を受ける日本側は、長崎目付の永井玄蕃頭げんぱのかみなおゆき尚志が総督となり、生徒は多くの幕臣と各藩から派遣された武士たちで構成された。生徒数は一〇九名を数えたが、主な人物としては勝海舟、矢田堀景蔵、薩摩藩の五代友厚、ロシアのプチャーチンのために「ヘダ号」を作った船大工の上田寅吉などだった。

伝習所の設立から一年と四ヶ月後に第一期生の多くが訓練を終えて江戸に引き揚げた。それからしばらく経った秋の九月に第二期が開始され、訓練生の補充が行われる。第一期では蒸気機関方の養成が手薄であったこと、長崎地役人による海上警備訓練の必要が生じたことなどによる補充である。集まった生徒は百名弱

であつたが、江戸からの新規参入者は十二名で、地元からの訓練生が大半を占めていた。

それらの生徒が第二期生になるが、教師団の方もライケン大尉の一行からカッテンディーケ大尉の一行へと交代する。急ごしらえの第一次とは違って、第二次教師団は予めオランダの海軍で希望者を募り、適否を選考した上で任命された。その結果、広い分野にわたる技術者がバランスよく加わった質の高い教師団が編成されることになる。また、カッテンディーケの一行は、幕府がオランダに建造を委託していたヤパン号（後の威臨丸^{かんりんまる}）をオランダから日本まで回送する役割も担っていた。そのヤパン号は最新式の艦船で、大きさはおよそ50メートル、幅8メートルで排水量は六三〇トン。三本マストに外輪ではなくスクリューを取り付けた蒸気船である。

自前の戦艦建造をオランダに委託した江戸幕府は、完成後の戦艦の運航と修理方法やそのための科学知識の教育を強化することも併せて要請していた。江戸幕府の要請に応えることは国策に適っていたため、オランダ政府は海軍士官の中で最も有能かつ経験豊かなカッテンディーケに白羽の矢を立て、必要な人員の確保と人選を命じたのである。

ところで、オランダ政府が強く推すカッテンディーケ大尉とはどのような人物であろうか。彼は、一八一六年一月にオランダのハーグで生まれ、メーデンブリックの海軍兵学校に進んだ。十九歳で兵学校を卒業するとすぐに蘭領東インドに航海し、その四年後には大西洋を巡航している。二五歳時に海軍大臣の副官となり、その後も蘭領東インドや大西洋を巡航した後、ウィルヘルム三世の侍従武官に就いている。オランダ海軍

の中でもエリートコースを着実に歩んできた人物と言える。

日本行きの人選を命じられたカッテンディーク大尉は造船と戦艦の操縦、砲術や蒸気機関学に長けた士官に加え、医師としてポンペを連れてゆくことを考えた。

一方、カッテンディークに目をつけられたポンペは、一八二九年の五月にオランダのブルージュにある兵營の将校宿舎で生まれた。父は軍人であったため、生後もオランダ国内を転々として育つが、十六歳になったとき、自ら希望してユトレヒト国立陸軍軍医学校に入学する。ユトレヒトの軍医学校は四年制で定員が五〇〇六〇名。即戦力となる軍医を養成するため実技に重きを置いた厳しいカリキュラムが組まれていた。真面目で実直なポンペは、すべての授業に欠かさず出席して、講義内容を一字も漏らさず丁寧に筆記した。

四年後、二十歳になったポンペは軍医学校を無事卒業、三等軍医の資格を得て哨艦スヘルデ号に乗船。その後も軍医として幾つかの軍艦を乗り継ぎ、一八五一年には外輪の蒸気船メラピ号に乗って蘭領東インドへと赴く。彼は、新任地でも幾つかの軍艦に乗務したが、この間にスマトラ島で起きた暴動時の医療班に加わり、周辺のモルツカ島やニューギニアではレプラ（らい病）の調査研究にも携わった。

二六歳になったとき、ポンペはオランダに一時帰国して、ニューディープにある海軍病院に勤務、ここで彼は二等軍医に昇格している。翌一八五六年に今度は軍港ヘレフトスライスの哨艦に乗務となった。

軍港の戦艦乗務に就いていたポンペのもとに、ある日、カッテンディーク大尉が訪ねてきた。そして、オランダ政府が派遣する教育団の一員として、日本に行くことを要請する。ポンペにとつて大尉は陰になり日

向になってポンペの身を案じてくれた恩人である。ポンペは、日本へ行くことをその場で快諾し、自分を選んでくれた大尉に感謝の意を伝えた。

かくして、ポンペはオランダの軍港ヘレフトスライスからヤパン号で日本に向かい、我が国の医学や物理・化学等の近代化教育に情熱を傾けることになっていく。

〈以下、次号〉

【主な参考資料】

・クラゲに学ぶノーベル賞への道

下村脩（長崎文献社）

・ポンペ 日本滞在看聞記

沼田次郎・荒瀬進訳（新異国叢書）

・ポンペー―日本近代医学の父―

宮永孝（筑摩書房）

・長崎伝習所の日々

カッテンディーケ・水田信利訳（東洋文庫）

・長崎のオランダ医たち

中西啓（岩波書店）

・出島のくすり

長崎大学薬学部編（九州大学出版会）

ほか多数

【編集後記】

■地球温暖化が叫ばれて久しいが、今年ほどそれを実感させられた年はないと思う。先ず、雨の日が多く、降る量も半端ではなかった。しかも能登半島や山形のような降雨量が比較的少ない地域にも容赦なく大雨が降り注いだ。さらに記録的な猛暑が秋になっても延々と続いた。

■気候に限らず、人の世も混乱と混乱に陥っている。ウクライナや中東における紛争の泥沼化。アメリカの大統領選挙ではトランプ氏が圧勝し、彼が打ち出す予測不能の政策に世界は恐々としている。国内では衆議院選挙で与党が惨敗。少数与党の不安定な政権が発足。パワハラ問題で揺れた兵庫県の知事選では、SNSによるダーティーな選挙運動が問題視されている。

■そして、生成AIである。筆者は辞書代わりにweb検索をよく用いるが、最近では真っ先にAIが回答を示してくれる。実に有難いと思う反面、“物書き”はこれからどうなるのかと不安に駆られる。懸賞小説の募集要項に「AIによる作品は除外する」とまで書かれるようになっていたのである。

■そのような時節に、『文芸草の丘』の第二七号を発行する

運びとなった。今回のコンテンツは詩二編と短編小説、ショートショートにエッセイおよび連載小説が二編、合計七編である。これらの掲載作は、AIとは違うレベルの、独創的な作品であることを確信している。

〈香取 記〉

【会員と連絡先】

安達 真魚 kiyonori.s@gmail.com
いんば 華子 bach.goldberg-variation@hotmail.com
香取 淳 katori.jun27@gmail.com
中川 とら nakagawatoral@gmail.com
畑中 康郎 ktakasug@am.em-net.ne.jp

草の丘 第二七号

発行 二〇二四年 十二月一日

編集兼発行人 印旛文学の会 香取 淳

連絡先(携帯)とメール 080-5533-1002

katori.jun27@gmail.com

URL <http://bungeikusano-oka.raindrop.jp>